









2019 年度 静岡大学 地域創造学環





フィールドワーク報告







大学を飛び出し、 地域の皆様と連携し 学んできた成果を ご報告いたします。













第4回地域創造学環フィールドワーク報告会にあたって

新型コロナウイルスの感染拡大防止を巡り、全国に緊急事態宣言が発出されるなど、地域 社会が直面する大きな危機感の中、地域創造学環では本フィールドワーク報告会のあり方を 検討して参りました。第4回は残念ながら紙上での報告会となりましたことを、関係者の皆 さまにお詫び申し上げます。

さて、平成28年度から始まったフィールドワークの実施においては、行政をはじめ地域の皆さまから、学生への貴重な学びの場を与えていただいて参りました。また、毎年の報告会に伴って開催される地域連携会議では、フィールドワーク教育における忌憚のないご意見、アドバイスもいただいて参りました。初期には手探りでなかなか先の解決が見えない地域課題に対し試行錯誤ばかりであったことを思い起こします。学生は時に自身の無力さを痛感し、自分たちだけは成し遂げられない課題に向き合う中、地域の皆さまからの叱咤激励と持続的なサポートを得ることで着実に歩みを進めることができました。そうした中、学生は自分たちの学びや成長がゴールではなく、協働によるプロセスやプロジェクトを共有し育てることが目的であることに徐々に気づいてきたことと思います。現在の地域創造学環の特色である本カリキュラムは地域の方々との関わりによりますます熟成してきているといって良いでしょう。皆さまの変わらぬ交流・連携・協働に心より御礼申し上げます。

令和元年は静岡県内14箇所、16テーマで活動を実施いたしました。果たして地域で求められているニーズとのマッチングが果たされているでしょうか。ぜひご覧いただけるようお願いいたします。そして、毎回申し上げることですが、フィールドで鍛えられるのは学生ばかりではありません。引率する教員もまた試行錯誤を繰り返し、よりブラッシュアップした姿をお見せできるよう取り組んでおります。

地域創造学環はまだまだ発展途上です。持続可能な社会の発展に寄与する専門人材の育成のため皆さまには引き続き学生たちの歩みを温かく見守りつつ、ご指導くださいますようお願い申し上げます。

なお、地域創造学環のホームページ上(http://www.srd.shizuoka.ac.jp/)でフィールドワークの様子を公開・更新しております。こちらもご覧いただければ幸いです。

2020年5月28日

国立大学法人静岡大学 地域創造学環長 江口 昌克

目 次

地域創造学環とは/フィールドワークの取り組み	2
地域創造学環のフィールドワーク/フィールドとテーマ	3
2019年度フィールドワーク報告 ※表記の学生の学年及び教員の職位等は2019	年度のもの
静岡市 清水港周辺地域	4
静岡市 庵原地区	6
静岡市 駒形通四丁目商店街	8
静岡市 浅間通り商店街	10
焼津市 浜通り	12
浜松市 浜松文芸館(公益財団法人 浜松市文化振興財団)	14
浜松市 佐久間	16
田園空間博物館 南遠州とうもんの里	18
御前崎市	20
松崎町(商店街)	22
松崎町(観光と防災)	24
東伊豆町	26
伊豆半島ジオパーク (保全と防災)	28
伊豆半島ジオパーク (教育)	30
県営団地	32
学内地域連携拠点	34
2019年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声	36
フィールドワークにご協力いただいている地域のみなさまからの声・	38

地域創造学環とは

静岡大学地域創造学環とは、平成28年4月にスタートした従来の学部の枠組みを越えた新しい全学学士課程横断型教 育プログラムです。静岡大学のすべての学部(人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部)の授業を履 修することができます。幅広い教養と高い専門知識を身につけながら、積極的に地域(フィールド)に飛び出し、より魅力的 な地域社会の創造に取り組むことができる人材を育成します。



フィールドワークの取り組み

現在16テーマで、地域の方々と交流しながら地域の課題や資源を発見・探求し、課題解決のための提案や実践を行っています。

地域創造学環のフィールドワークの特徴

- ① 地域に密着した体制により、地域の実情と課題に正面から対峙
- ② 5コースを融合したチームを編成し、異分野が結束して取組む
- ③ 縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする
- ④ 単年度ではなく、中長期的に地域と関わり、信頼関係を醸成

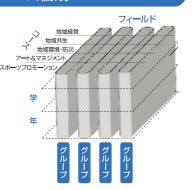
フィールドワークの年次別到達点設定

フィールドワークは単年度完結ではなく、数年間にわ たり地域及び関係者と連携しながら課題解決に取り組 みます。

1年次 🚜 地域資源や

コース融合のチーム編成

コース、入学年とい う枠にこだわらない グループ編成でフィー ルドワークを行ってい ます。



※内容は2019年度時点のものです。

2020年4月から「地域サステナビリティコース」、「アート&マネジメントコース」、「スポーツプロモーションコース」の 3コース制に再編いたしました(この3コース制は2020年度の入学生から適用されました)。

地域創造学環のフィールドワーク/フィールドとテーマ

静岡市

清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報 発信とおもてなしによる 交流・活動人口の増加

地域資源を活かした

食・スポーツによる地域



駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街 のにぎわい創出

浅間通り商店街

浅間通り商店街の

にぎわい創出

掛川市

環境づくり

田園空間博物館

南遠州とうもんの里

子どもを呼び込むための



県営団地

県営住宅団地における 居場所づくりと地域福祉 資源のネットワーキング



焼津市

浜松市

浜松文芸館

若者の文芸離れを

食い止めよう

佐久間町

暮らし体験で

交流の環づくり

公益財団法人浜松市文化振興財団

庵原地区

活性化

焼津市浜通り

地域住民と高校生との 交流に基づいた 地域づくり活動



学内地域連携拠点 (静岡大学静岡キャンパス)

静大発 地域と大学の 連携を広めよう!



伊豆半島ジオパーク (保全と防災)

伊豆半島ジオパークに おける環境保全と防災対策



伊豆半島ジオパーク(教育)

伊豆半島ジオパークの 持続可能な開発と教育 (SDGs/ESD) の推進



東伊豆町

新しい観光スタイルの 発掘・創出プロジェクト



松崎町(商店街)

なまこ壁が残る松崎町 商店街のにぎわい創出



松崎町(観光と防災)

防災と観光の両立



御前崎市

御前崎市

御前崎スポーツ振興 プロジェクト~スポーツに よる交流人口の拡大と 産業振興の推進~



静岡市 清水港周辺地域

浜田・清水地区の情報発信とおもてなしによる交流・活動人口の増加

フィールドワーク実施協力者

メンバー

(アート&マネジメント) 3年 樋口加奈、2年 玉木絢女

有限会社都市環境デザイン研究所 (スポーツプロモーション) 3年 沼田浩範、野村圭生、溝上敬佑、2年 上田七珠、長谷川恭平、

1年 大川原翔、深井康平、本田悠

指導教員:○准教授 石川宏之、教授 岩田孝仁

※○は青仟教員



地域概要



清水港周辺には、新鮮な魚を食べることができる清水魚市場「河岸の市」や、港に隣接した複合商業施設「エスパ ルスドリームプラザ」などの港を有効活用した施設があり、魅力的な資源が多く存在する地域である。その他にも、 清水港に所縁のある清水次郎長の牛家や清水港船宿記念館「末席」などの観光名所が点在しており、さらに美しい富 士山が観望できるなど、観光としての資源も多く存在している。近年では、外国客船の寄港が増加しており、外国人 観光客が多く訪れるようになった。しかし、清水区の人口は少しずつ減少しつつある。



これまでの活動



①イベント「平成最後の秋祭り」の企画・開催

空きスペースを有効活用した取り組みを行った。当日は外国人観光客を含め多くの方々に参加していただけた。

②浜田地区•清水地区冊子作成

それぞれの自治会の方々と一緒に紹介冊子を作成した。今後両地区を知らない人たちへのPRとなることが期待される。

③次郎長通り商店街の活性化に向けた提案

商店街周辺の住民と商店街の店主を対象にアンケート調査を行った。 その結果をもとに活性化に向けた取り組みを考え、提案・発表をした。



2019年度の活動のテーマと目標



昨年度までは、行政と連携をしてフィールドワークを行っていた。しかし今年度は学生が主体となって行うことに なった。よって今年度からは学生が計画・実行をしなければならない。しかし清水港の現状を知らずに何かを実行を しても効果がないので、今年度は「清水港周辺地域の現状を知る」というテーマで活動をすることになった。清水港 周辺地域の強み・弱み・機会・脅威の4つの観点を整理し、クロス分析で課題を抽出した。そしてそれを来年度以降 の活動で活かせるようにする。



地域創造学環



①入江地区・浜田地区・日の出地区の街歩き

現在の清水港の状況を知ることを目的に、3つの地区の街歩きを行った。街歩きをすることにより、3つの地区の 特徴や良さ、改善点までも知ることができた。

②ヒアリング

清水港周辺地域をもっとよく知るために、静岡市商業労政課・静岡海洋文化都市推進本部・エスパルスドリームプ ラザに聞き取り調査を行った。

街歩きをして、目で見るだけではわからないようなことまで聞くことができた。

③浜田小学校にアンケート調査

少子高齢化の課題解決として若者、子育て中の親が住みたくなる、子供たちが自慢できる地区とはどのような地区 かを模索し、提案につなげていくことを考えている。

そこで学区内の子どもたちの意見を把握するためにアンケート調査を行った。アンケート結果を通じて、浜田地区 では巴川をはじめとする生活環境や児童・小学校と地区の関りなどが理解できた。

④ミナトブンカサイの見学

ミナトブンカサイは、旧清水三保線沿道の倉庫群の利活用を学生等が中心に企画運営している。 イベントを企画・運営するうえで学ぶことがたくさんあった。





★地域固有のイベントによる国内外の人の集客・交流

→地域特性や資源を再確認して、清水港周辺地域ならではの活動を考え、実行する。

★SNS等を活用した情報発信による集客・交流

→イベント等を開催しているが、情報発信力の低さから集客ができていない。 その課題を克服するために解決策を考える。

★若い人を含め、地域住民の興味や関心を高める

→若い人が少ないため、若い人に向けたイベントを実施し、興味を持ってもらう。

★空き店舗など地域資源を活用した商店街・地域の活性化

→日の出地区の空き倉庫などを有効活用し、商店街・地域が活性化するようにする。

★地域と学校・企業等との多様なつながりや関係性の強化

→継続的な関わりの中で築いてきた関係性を維持し、新たな関係作りと連携を目指す。



静岡市 庵原地区

地域資源を活かした食・スポーツによる地域活性化

(アート&マネジメント) 3年 矢勢才華、2年 岸山莉子

(スポーツプロモーション) 3年 大城ひいろ、山下宇光、山梨空良、2年 植松舞、木村心香、 竹端勇人、1年 小野田泰地、神原悠輔、木川静、巽文花、

公益財団法人静岡市まちづくり公社 **廉原地区連合白治会**

フィールドワーク実施協力者

指導教員: 〇准教授 村田真一、准教授 杉山卓也、特任助教 川﨑和也

※○は責任教員

山口理牛、山地菜月

地域概要

庵原地区は、静岡市清水区の北部に位置する。人口は約1万人、総世帯数は約3千世帯である。みかんの生産が盛 んで、多くの茶畑とみかん畑が広がっている。また、清水ナショナルトレーニングセンター(以下トレセン)や庵原 球場などのスポーツ施設が充実しており、最近では、プロサッカーチームであるヴァンフォーレ甲府が毎年1月にト レーニングキャンプを行っている。このように庵原地区は"食"と"スポーツ"が主な地域資源といえる。静岡市全体で 人口流出、高齢化が問題になっているが、それは庵原地区も同様である。この問題を解決するために、魅力あるまち づくり、アクティブな高齢者を増やすための生きがいづくりが必要となる。現在、庵原地区では、地域資源を活かし たまちづくりを目指して、様々なコミュニティ活動を再検討しているところである。



↑庵原のまちの山からの眺め



↑清水ナショナルトレーニングセンター

これまでの活動

昨年度は、自分たちで庵原地区を体感することで、「よそ者」の視点から庵原マルシェへ参加しウォークラリーのお 手伝いや、出店されるお店の看板作成、イベントに使用したくじ引きのデザインを行った。

2019年度の活動のテーマと目標

昨年度の活動では、庵原地区の魅力や課題の発見に努めながらも、非日常的な催しやイベントへの注視に留まって いた。それを踏まえて今年度は、庵原地区住民の運動・スポーツ活動実態を把握し、そこから生活・暮らしの改善に 資する基礎資料を得るため、アンケート調査実施を主な活動とした。さらに、調査結果を分析し、住民の方へ説明報 告を行いながら、実際にどのような施策が必要とされるかの検討までを目標に定めた。つまり、庵原地区のスポーツ 資源に着目しながら、日常的な課題に迫るものであった。

地域創造学環

2019年度取り組んだことと成果

左記の今年度の目標を達成するために、庵原地区連合自治会の協力を得て、庵原地区自治会に加入している全戸を 対象としたアンケート調査を実施した。

実施期間:令和元年12月10日~令和2年1月31日

配布数:2770

回収数(回収率):1903(68.7%)

調査項目 ①基本情報

②クラブ活動状況について

③身近な場所やスペースを利用しての スポーツ活動

④スポーツ教室での活動状況

⑤②~④を合わせての全般的活動

⑥トレセンについて

⑦庵原地区に関する意見

アンケート調査を通じて分かったことは、「クラブ や教室に通って運動をする人は少ないが自由時間に

一人で運動をしている人は多くいること」「トレセン を利用する人が少ないこと

「トレセン利用者が少な い理由には、プロ選手しか使えないというイメージ が多少ある他、そもそも住民がスポーツを実施して いないから」ということ等であった。 また庵原地区連合自治会の会議で、アンケート調

↑アンケート結果の報告会

査結果について報告を行った。地元住民の方々から、「庵原だけでなく県や国、世界などとも比較してみたらどうか」 「住民の健康状態の比較をしてデータを出してみたらどうか」「高山から庵原も見た感想はないか、そこから何かでき ないかしなどの意見やコメントをいただくことができた。

これから取り組むべきこと

まずはアンケートをさらに詳細に分析していき きたい。そして、地域の方々と連携し、スポーツ 実施頻度を高めるための取り組みを行っていきた いと考える。具体的には、実際にスポーツ教室を 開催することや、「運動・スポーツをみんなで語る 会| などの座談会やオープンカフェの実施によっ て、運動・スポーツの魅力に関する情報収集・発 信を行いたいと考えている。このような取り組み を行うことで、例えばトレセンについても、スポー ツ愛好者に限らず、その他大勢の地域の方々が集 まる場所となるような拠点づくりに貢献できるも のと思われる。



↑アンケート回収後話し合い



静岡市 駒形通四丁目商店街

駒形通四丁目商店街のにぎわい創出

メンバー

(地域経営) 3年 岡本怜音

(地域共生) 2年 岡本敦、黒田千晴、1年 出木美沙緒 (アート&マネジメント) 3年 稲垣茉里、1年 渡邊紗也佳

指導教員: () 准教授 井原麗奈、教授 伊藤文彦、准教授 髙橋智子

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 駒形通四丁目商店街のみなさま 静岡市葵区城西地域包括支援センター 静岡おまちバル実行委員会

地域概要

駒形通四丁目商店街は、静岡市葵区にある商店街である。多くの店舗の営業時間が9:00~18:00であり、商店街内にはトリコロールのアーケードがある。お客さんの高齢化や人通りの少なさが大きな課題となっている。昨今こういった課題を解決するために「こまち会」という組織が発足され、イベントの開催等を通して、地域の活性化を目指している。



これまでの活動



◆マップ作り

一昨年度は商店街のマップ作りを行った。マップにはお店の営業時間やお店の店主さんの特徴について書かれている。このマップ作りや 懇親会によって、学生と商店街の距離が近くなった。

◆『駒形パシャらっち』の開催

昨年度は『駒形パシャらっち』という写真イベントを行った。このイベントを行った目的は、イベントを通してより多くの人に商店街へ足を運んでもらうということ。また、商店街内の店舗間のつながりを持ってもらうということの二つにあった。学生がこのようなイベントを行うことにより、商店街が華やかになりにぎわっているような印象を受けた。



2019年度の活動のテーマと目標

今年度の活動のテーマは駒形通四丁目商店街の活動だけでなく、包括支援センターやおまちバル等の活動に参加し、多角的な視点から地域活性を目指すというものである。現在、駒形通四丁目商店街はお客さんの高齢化や若者の来訪数の少なさなどの大きな課題を抱えている。こういった課題を解決していくためにも様々な活動に触れて、より多くの視点を獲得していくことが必要だと考え、今回のテーマに至った。また、このようなテーマを背景に、2019年度の目標は、駒形通四丁目商店街でも効果を発揮するようなイベントの模索とした。この目標を達成するためにおまちバル等の活動からイベントの作り方等を学んでいきたいと考えている。

2019年度取り組んだことと成果

◆学内での認知症サポーター養成講座の開催

城西地域包括支援センターで、包括支援センターについてや、地域が抱える問題についての話を聞き、認知症についての事前学習を行なった。その上で大学に講師を招いて、学内で認知症サポーター養成講座を開催した。当日は40名(うち教職員5名)の参加があり、地域の中で認知症サポーターとして自分たちに何ができるのかを学んだ。



◆駒形通四丁目商店街でのインタビュー調査

商店街の店主の皆さんにインタビューを行い、「こまち会」に対しての認知度や商売をしている上で困っていることについて調査を行い、その結果を商店街にフィードバックした。インタビューを通して分かったことは「こまち会」について知らない店主さんや、お店をやっていくのが精一杯で、イベント等に主催者側として参加する余裕がないと話す店主さんが多いことだった。また、店主の皆さんが抱える、困っていることとして、常連さんやお店で働く人の高齢化や売るものがなくなってきていることが挙げられた。

◆おまちバルでの活動

静岡のおまちで毎年2回開催されている「静岡おまちバル」 の実行委員の方々を大学に招いて事前学習を行なった上で、静 岡おまちバル(2019, 秋)に参加した。

その後に実行委員の方々との話し合いを通して、学生主体の コンセプトバルを行うことを目標に、現在次のおまちバルに向 けた実行委員会の会議に参加し、学生にできることを取り組ん でいる。



これから取り組むべきこと

○こまち会の活動

駒形1丁目から6丁目の店主さんが参加する「こまち会」の会議に参加し、駒形全体の現状や課題について知る。そして、10月に行われるハロウィンイベントを通して、駒形の商店街にどのような変化があったかを調査する。

○おまちバルの活動

次回のおまちバルに向けて引き続き実行委員会の会議に参加し、主催者の方々と相談しながら、おまちバルの中で学生ができることをしていくと同時に、イベントを主催するとはどのようなことであるか、何が必要であるかを学んで行きたい。

静岡市 浅間通り商店街

浅間通り商店街のにぎわい創出

メンバー

(地域経営) 3年 吉田慎太郎、2年 加藤秋沙、森智徳、1年 山梨純怜

(地域共生) 3年 青木佑未

(アート&マネジメント) 3年 佐野乃雪、長澤由奈、2年 今西真紀、田中真衣、前田春香、

1年 上倉朋子、高橋美貴、萩原亜祐実

(スポーツプロモーション) 3年 宮村勇希

指導教員:○特任教授 平岡義和、准教授 川原崎知洋

※○は責任教員

地域概要

静岡市中心部に位置する静岡浅間神社から、駿府城公園方面の中町交差点までを結ぶ、600メートルの「浅間通り」に存在する商店街。かつては、浅間神社の門前町、または駿府城下町として、静岡の産業、流通の中心地であったが、百貨店やコンビニの進出、通信販売の普及等による客の減少で20年ほど前から衰退が始まっている。平日の昼間でも人通りは少なく、シャッターが下りたままの店が目立つ。

しかし、毎年秋には静岡とタイの交流事業として、この地に生まれタイに渡って活躍した「山田長政」にちなんだ 長政まつりが開催されており、多くの観光客が訪れる。また、毎月1日に浅間神社で行われている安倍の市にも、野 菜やお菓子などを目当てに地元の方が集まり、賑わい創出の場となっている。



合くぐりの輪



長政祭りの絵馬奉納行列に参加

プ班という3つの班を編成し活動を進めた。

2019年度の活動のテーマと目標

な催事を経験したが、いずれも「受動的な立場」での参加という形に留まっていた。

これまでの活動

長政祭り

日本とタイの交流の架け橋となった浅間通りにゆかりのある 山田長政にちなんで行われているお祭り。主に子供広場を企画、 運営し、タイの遊びや文化をこどもたちと一緒に楽しんだ。

フィールドワーク実施協力者

静岡浅間通り商店街振興組合

輪くぐりさん

浅間神社に大きな茅の輪が設置されその輪をくぐり無病息災を祈るイベント。当日は本部や各ブースの運営補助を行なった。

駿河東海道おんぱく2019

静岡市で行われたイベント「駿河東海道おんぱく2019」。浅間通り商店街で行われた御朱印ガールをターゲットとしたブラ歩きツアーに参加した。

その他に、上級生が下級生に浅間通り商店街を詳しく紹介する商店街ツアーや商店街の新たな魅力探しを行なった。

2019年度取り組んだことと成果

輪くぐりさん

今年度は新たに構成した3班(広報班・制作班・マップ班) に分かれ輪くぐりさんに参加した。

広報班ではFacebookを利用し、輪くぐりさんに向けてのカウントダウンの記事を掲載。また、子ども向けのチラシを制作した。制作班では七夕飾りを企画し、子どもたち250人以上が来場。七夕飾りをプラ板で制作した。願い事を書いた短冊とともに笹に飾られ、商店街を彩った。マップ班では浅間通り商店街のマップをリニューアルし、一年間の主な行事の紹介を盛り込んだイラスト付きの新しいマップを作成した。

長政祭り

昨年に引き続き、子ども広場という幼稚園生から小学六年生を対象にした遊びの場を運営。タイに特化するのではなく、子どもたちが楽しめる遊びや、昨年度好評だった「地面にお絵描き」を行なった。天候に関わらず楽しめるよう長政祭りを周知してもらうための塗り絵も作成し、塗り絵は後日商店街に展示した。制作班は「インスタ映え」するようなフォトスポットづくりを企画し会場に設置した。今年度も多くの人が来場し、長政祭りを訪れると大学生が遊ぶ場を提供しているという印象をつけることができた。



地域創造学環

七夕飾り制作を教えている様子



子ども広場「地面にお絵描き」

これから取り組むべきこと

広報班

① 浅間通り商店街のPR動画の作成

今まで目を向けてこなかった動画という発信方法を新たに検討。今までよりも幅広い層へ商店街の魅力を伝える。

② 「夢門前だより」による学生の活動報告

商店街で発行されている「夢門前だより」という冊子において学生が行なっている活動の記事を掲載。商店街の方々や、地域の人々に活動を知ってもらい、認知度の向上を図る。

③ Googleマップへの情報の追加

Googleマップに掲載されている商店街の情報が極めて少ないことから、Googleマップに情報を追加することで、商店街に足を運びやすくする。

制作班

① ワークショップの開催

催事のときに限らず、ターゲットを絞った新たなワークショップを検討する。具体的には、「子供たちが思い描く 商店街を描く」「オリンピックに関連したもの」などを検討している。

② 環境問題に対する取り組み

商店街ではタイとの友好の証である長政祭りが毎年行われているが、タイでは近年環境問題が深刻になっているという。そのことを踏まえ、商店街でも環境問題に対する取り組みを強化する。ゴミになってしまうプラスチック製品の活用や、マイ箸・マイバック・マイボトルの推進活動を進める。

マップ班

① グルメとの連動

誰でも気軽に足を運びやすいグルメに注目。今年度作成したマップに加え、新たにグルメ情報を提供できるものを検討する。今あるマップの活用方法も検討する。

昨年度までは商店街で行われている活動の運営補助という形で地域活動に参加。一年を通して商店街で行われる様々

今年度は過去の活動から得た経験を踏まえ、学生がより主体的に地域活動に参加していくことをフィールドワーク

全体のテーマ・目標として掲げ、活動を効率的かつ多方面に展開していくため、グループ内で広報班、制作班、マッ

焼津市 浜通り

地域住民と高校生との交流に基づいた地域づくり活動

メンバー (地域経営)

3年 藤田真由、矢ケ崎花音、2年 坂井朝陽、宮嶋洋仁、

1年 佐々木啓人、武田栞奈 地域共生) 2年 山口桃花

(地域共生) 2年 山口桃花 (地域環境・防災) 3年 大橋和真

(スポーツプロモーション) 3年 種茂勇斗、1年 山口みどり

指導教員:○准教授 太田隆之、教授 橋本誠一

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 焼津市行政経営部政策企画課 焼津市交流推進部観光交流課 NPO法人浜の会 静岡県立焼津水産高等学校 NPO法人わかもののまち

地域概要

浜通りは、駿河湾沿岸に沿った街道を中心に 形成された、南北に1kmほど続く集落である。 集落内には、かつて運河としても機能した堀川 が北へと流れている。北浜通・城之腰・鰯ヶ島 の3地区に分かれており、魚商人が築いてきた 沿岸部特有の伝統的家屋や小路などの焼津の歴 史と文化が豊富にある地域である。例として、 明治時代に怪談小説で名の知れた、小泉八雲が 滞在し多くの作品をこの地に残した。また、歴 史的資源だけではなく、地区ごとの夏祭りや「あ かり展」などの伝統的な行事が多く存在してい るが、人口減少や少子高齢化の影響から、参加 者が減少傾向となっており、存続が危惧されて いる。

浜通りの街並みの保存や活性化を目指して浜 通り活性化フォーラムが組織され、活動が行わ れている。



浜通りで実施されるあかり展の様子

これまでの活動

- 浜通り活性化フォーラムへ参加し、旧服部家の利活用に関して意見を交換した。
- 毎年夏に開催されるあかり展で来場者に対して浜通りの印象などに関してアンケート調査を実施した。
- 焼津水産高校の模擬会社「魚国」の出店イベントで来場者に対してアンケート調査を行った。
- 同校流通情報科3年生とワークショップを行い、焼津に対しての印象や上記の「魚国」でのアンケートについて意見を交わした。

2019年度の活動のテーマと目標

今年度は焼津市内の若者の動向にも注目し、若者が地域に残るためにはどのようなことが必要なのかを考えていく。

2019年度取り組んだことと成果

① 浜通り活性化フォーラムの会議への参加

フォーラムの会議に参加し、浜通り活性化活動の状況と課題を把握した。

② 市のボランティア人材バンクに登録する市内中高生へ のアンケート調査と解析

焼津市の中高生に向けて「まちづくり活動・ボランティア活動ならびに焼津市への印象・評価に関するアンケート」を行い、その結果を解析した。

③ 焼津水産高校3年生との交流

上記アンケート調査を念頭に置いたワークショップを行い、 まちづくり活動や焼津市への印象・評価について議論した。

④ 「若者政策」に関する講演・勉強

焼津市を拠点に活動するNPO法人「わかもののまち」の代表である土肥潤也さんより、国内外の若者主体のまちづくりならびに若者政策に関する話を伺い、これらのテーマに関する動向を学んだ。

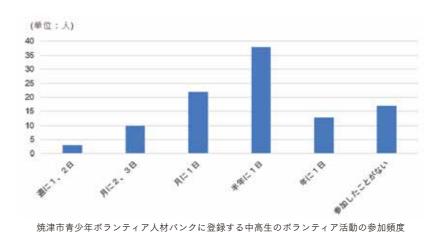


地域創造学環

「あかり展」で使う行灯の準備活動への参加



焼津水産高校でのワークショップの様子



これから取り組むべきこと

- 中高生へのアンケートや焼津水産高校とのワークショップを通じて把握した若者の傾向や意見を、浜通りの方々や 焼津のまちづくりに携わる人々に伝える。
- 若者のまちづくりに関する学習等の活動を踏まえ、焼津市における若者主体のまちづくりのあり方やその可能性についての検討を行っていく。
- 浜通りの地域の実態や活性化の取り組みについての調査を行い、課題の所在を把握するとともに活性化の取り組みの成果と対比し、今後のあり方について学生の立場から検討する。



浜松市 浜松文芸館 (公益財団法人 浜松市文化振興財団)

若者の文芸離れを食い止めよう

メンバー

(地域経営) 2年 尾本優里香 (地域共生) 2年 齋藤紫苑

(地域環境・防災) 3年 伊藤悠希

(アート&マネジメント) 3 年 古川綾乃、1 年 半田颯太、松本愛子 指導教員:○教授 袴田光康、准教授 井原麗奈、講師 占部史人 ※○は責任教員 フィールドワーク実施協力者

公益財団法人浜松市文化振興財団浜松文芸館

地域概要

浜松文芸館は、平成27年4月に現在のクリエート浜松内の4階及び5階フロアの一部に移転・リニューアルオープンした施設です。館内では郷土の生んだ優れた文芸作家の業績を次世代に引き継ぎ、市民文化の向上を図るため浜松の文芸人の収蔵品を中心にした平常展のほか、作家、ジャンルに視点を当てた企画展を開催しています。

また、俳句、文学史、言葉など、広い文芸分野をテーマにした講座を開催し、身近に文芸を学び、楽しむ場、そして、文芸にふれ、多くの人々と語り合うにふさわしい環境づくりをすすめています。



クリエート浜松

これまでの活動

1 年目



2年目



活動2年目となる2018年度には2度にわたりワークショップを開催しました。対象をそれぞれ中高生と小学生に分け、中高生には合作俳句、小学生には宝探しや物語の穴埋めを中心とした企画を行い、文芸の楽しさに触れてもらうことを目標にしました。

2019年3月には文芸館の一部をお借りし、一般の方に向けてこのフィールドワークの活動を紹介する展示を行いました。

2019年度の活動のテーマと目標

文芸を身近に感じてもらう/文芸館を身近に感じてもらう

前期は新たに計画していた夏のワークショップの実施に向け活動しました。今回は対象を小学生高学年とし、季節とも絡めるなど楽しいと同時に言葉に対して親しみを覚え、学びも得られるようなイベントを企画しました。

また、実際に小学校に訪問するなど、イベントの広報 活動にも力を入れ、元々文芸に興味が無い子たちにも参 加してもらえるよう呼びかけました。 後期にはクリエート浜松の方の協力も得て、クリエート浜松1階に文芸館の紹介コーナーを作成しました。

クリエート浜松には1階で行われるイベントや2階、3階で行われる展示を目的に1年を通してたくさんの方が来場しています。そのような方達に5階にある文芸館に興味を持ってもらったり、足を運んでもらえるような展示を目指しました。

地域創造学環

2019年度取り組んだことと成果

小学生高学年向けワークショップ:きらキラ☆575

7月14日、クリエート浜松の1階にて七夕と俳句をテーマにしたイベント、「きらキラ☆575」を開催しました。思い思いに夏の俳句を詠み、班内や全体で発表したり感想を言い合ったり、最後には思い出や願いのこもった俳句を短冊に書いて飾ろうというワークショップです。フィールドワークメンバーも俳句作りはほぼ初めてでしたが、事前に作成したワークシートに沿うことで1ステップずつ進められ、無事に「先生役(リーダー)」を務められました。最終的には小学4年生から小学6年生までの参加者23名全員が自分の俳句を詠むことができました。

終了後、参加者に実施した簡単なアンケートでは前向きなコメントが多く、「俳句のリズムを楽しんでもらう」「言葉に親しみを持ってもらう」といったこのイベントでの目標は達成できたと感じています。

文芸館紹介コーナー:等身大パネルとガチャ俳句

文芸館紹介コーナーではまず目を引くものとして<u>等身大パネル</u>の作成、そして文芸に触れ、文芸館まで足を運んでくれる仕組みとして合作俳句をもとにした「俳句ガチャ」を企画しました。

◎等身大パネル

紹介コーナーとしてクリエート浜松からお借りできたのは出入り口やエレベーターに近く、人通りも多い掲示板。何気なく通ったときでも等身大パネルの存在感でパッと目を引くことを狙いにしました。パネルイラストのイメージ元は活動1年目で作成したポスターです。

◎俳句ガチャ

上の句、中の句、下の句をリレー方式で詠んでいく合作俳句を元に、ガチャガチャのわくわく感を楽しみながら、時間を越えて合作ができる「俳句ガチャ」を設置しました。ガチャガチャを回したい!という思いから気軽に参加してもらい、文芸館まで上ってもらえるような仕組みづくりを行いました。1階と5階にそれぞれガチャ機を設置し、5階まで行くと合作俳句が完成します。





これから取り組むべきこと

- ●文芸館紹介コーナーの成果を主に俳句ガチャの参加者数から評価し、必要に応じて更新を行っていきます。
- ●夏、もしくは秋にかけて新たにワークショップを開催し、後期にはクリエート浜松と絡めた活動をしてみてはというのが文芸館側からの提案です。

基本的な活動の枠組みはその通りに進めていき、企画の中身は今までの経験も活かしながら、さらに広がりのある活動、浜松文芸館ならではの活動へとステップアップしていきます。

浜松市 佐久間町

暮らし体験で交流の環づくり

メンバー

(地域経営) 1年 清水良香

(地域共生) 3年 末広皐、2年 新井七津奈、1年 伊藤響、河合美智香

(地域環境・防災) 3年 清水大暉 (アート&マネジメント) 1年 服部翔子

(スポーツプロモーション) 2 年 魚住和未、籠谷遥 指導教員:○准教授 皆田潔、教授 江口昌克、教授 河合学、准教授 山本崇記

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 浜松市天竜区佐久間協働センター 佐久間パンプキンレディース

地域概要

浜松市北部、天竜川の上流の中山間地域に位置する佐久間町は、平成31年4月時点で人口は3,288人であり、65歳以上の高齢者がその60%を占めている。さらにここ5年間は毎年約150人人口減少している。急速に進む人口減少の地域課題を抱える中、NPOを中心として多くの地域住民が地域づくりに参画し、佐久間を支えている。



写真1:佐久間の自然

これまでの活動

- ①佐久間ダム竜神祭りやフェスタさくまに参加し、地域の方々と暮らし体験による交流を行った。
- ②佐久間の女性による食品加工グループ「パンプキンレディース」さんが製造する「ごまちゃん」及び、ピーナッツを加えてアレンジした「ごまぴ」の販売力向上に取り組んだ。
- ③地域の情報発信のために学生が発見した佐久間の魅力を広報誌『サクッとさくま』にまとめ、2回発行した。

2019年度の活動のテーマと目標

テーマ: 「暮らし体験による交流の環づくり」

目標:活動の中で佐久間の魅力を発見し、 広報誌『サクッとさくま』で地域外へ発信する。

各回のフィールドワーク活動において、交流の環づくりを基軸とする一連の流れを確立した。2年前から継続した交流を行うパンプキンレディースさんを起点に、山村の暮らしに造詣の深い方を紹介してもらい、実際に現場に赴いて暮らし体験をする中で交流を深め、『サクッとさくま』の取材を実施した。昨年度は16名を取材し、誌面で紹介させていただいた。

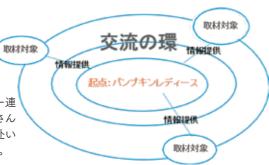


図1:交流の環イメージ図

2019年度取り組んだことと成果

暮らし体験・イベント

【こんにゃくづくり、山菜取り】

パンプキンレディースメンバーの此田みさゑさんが味噌やこんにゃくを自宅で作っていると伺い、こんにゃくづくりを教えてもらった。また、同会メンバーの馬塲まゆみさんには、山菜採りを教えていただいた。活動をする中で交わした何気ない会話から、フィールドワークのプログラムを組んでいる。

【竹細工、農業体験】

竹細工は橋本幹男さん、農業体験は鈴木博文さんのご自宅で体験させていただいた。 お二人との出会いは、佐久間のイベントである。

体験そのものから学びがあったが、実際の生活の場でこれまでの経歴などをお聞きしたことで、佐久間に暮らす方の実態を知る機会にもなった。

【フェスタさくま】

佐久間の方から声を掛けられる機会が増え、地域に受け入れていただいていることが 実感できた。出展のお手伝いをしている中での会話から、地域の方々の等身大の様子を 知ることができた。

【ザ・山フェス】

浜松市街で開催された中山間地域の産品を集めたイベントに初参加し、ごまちゃんとごまびを販売。静岡文化芸術大学や浜松学院大学の学生のブースもあり、つながりを持つことができ、フィールドワークの方法の違いなどがわかり、強い刺激を受けた。



写真2:クチナシ染め体験の様子



写真3:フェスタさくまにてお手伝いをしている様子

地域創造学環

2019年度発行 『サクッとさくま』

暮らし体験やイベントを元に半年に1回のペースで発行した。前期は佐久間の鮎、後期は観光をテーマとし、フィールドワークの活動が『サクッとさくま』のテーマ設定に直結している。

『サクッとさくま』は佐久間外や学内に佐久間の魅力をPRする目的の他、佐久間の方々にフィールドワークの活動を知ってもらう狙いがある。現在、佐久間ダム・電力館や佐久間図書館などに設置させていただいている。



これから取り組むべきこと

1. 佐久間内での活動

▷ごまちゃん、ごまぴ

パンプキンレディースさんの意向を聞きながら「ごまちゃん」のパッケージ改善や、「ごまぴ」のアピール強化を進めていく。 現在、「ごまちゃん」のリピーターは一定数いるが新規拡大を目指すため、若者世代へアプローチしていく。具体的には、学内 での試食会とアンケートの実施を考えている。

▷地図作成

これまでの活動で訪れた場所を網羅した佐久間地域の地域資源マップを作成する。学生が佐久間への理解を深めるためだけでなく、『サクッとさくま』等にも使用できる状態に仕上げる。

▷学生からのお礼企画

佐久間の豊富な食材を活かし、これまでにお世話になった方々を集めた食事会を開く。学生からのお礼の気持ちを伝える場とし、団体間の交流や佐久間の食材を用いた新商品の可能性を見つけ出す機会とする。

2. 情報発信

▷『サクッとさくま』

これまで町外向けに発行してきたが、地域住民及び学内も視野に入れ、学生の活動紹介の割合を増やす。また、これまで発行してきたものを一冊にまとめたガイドマップの作成に取り組む。

▷インスタグラムの活用

学内・入学希望者・佐久間地域内外へ、広く佐久間を知ってもらうため、各回の活動報告に加え、『サクッとさくま』だけでは伝えきれなかった情報を佐久間の美しい写真と共に紹介していく。

田園空間博物館 南遠州とうもんの里

子どもを呼び込むための環境づくり

メンバー

(地域経営) 3年 久保山健太、2年 朝倉大翔、1年 矢五田萌加 2年 溝下紗里奈、宮地珠妃、1年 秋山航、清水彩香 (地域共生)

(アート&マネジメント) 2年 星野未佳、1年 芳村日苗

(スポーツプロモーション) 4年 海野真由、嶋村浩直、3年 多治見帆香、萩原那緒、

1年 漆畑奈ヶ花

指導教員:○教授 日詰一幸、准教授 石川宏之、特任助教 川崎和也

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 NPO法人とうもんの会 蓮舟寺のみなさま

「田園空間博物館 南遠州とうもんの里 総合案内所」(以下、とうもん の里)は、掛川市の西南部にある施設である。広大な田園風景が広がっ ており、その風景は、南遠州地域の言葉で「稲面」「田面」を意味する 「とうもん」と呼ばれている。とうもんの里は、美しい景観、豊かな自 然、そして地域住民らが培ってきた伝統文化の魅力と価値を見直して 活用し、次世代に継承するために静岡県田園空間整備事業によって整 備され、2007年に誕生した。

掛川市から指定管理者の認定を受けて、とうもんの里を運営するの が「NPO法人とうもんの会」である。とうもんの会は2006年に地域住 民らが中心となって設立され、会員数は35名を数える(2019年4月現 在)。とうもんの会では、とうもんの里を拠点にして、農業体験、食加 工体験、地域文化のPRやイベント企画、地域の農水産物・加工品の PR販売などの活動を行っている。こうした活動を通じて、地域の農業 や農村の魅力を伝えて、ここを訪れる人びとのふれあいをつくり農業 の保全、地域の活性化につなげてゆくことを目的としている。

私たちは、とうもんの会、そして地域住民の方々らの協力を得なが ら、2016年10月よりとうもんの里を拠点にして、フィールドワークに 取り組んでいる。



夕暮れ時のとうもんの里



とうもんの会の方々



地域の皆様に向けた活動報告会

れまでの活動



【ふるさとの道ウォーク&みかん狩り】

とうもんの会の方々、親子、学生たち と話をしながらとうもんの自然を体感す るウォーキングイベントを実施。

自然のものを使って完成させるネイ チャービンゴや、学牛が作ったみかんゼ リーは、多くの人に好評だった。



竹ボウリングや竹ぽっくり、水鉄砲な ど、自然のものを利用した遊具を製作した。 子どもには新鮮さを、大人には懐かし さを提供することができた。一過性のイ ベントとは異なり、長期的に子どもたち を呼び込む仕組みづくりにつながった。



【とうもん図鑑デモ実施】

子どもたちが探検家になりきってとう もんの里で見つけた生き物を描いた絵や、 採集した植物などを貼り付けてひとつの 図鑑を完成させるプロジェクト。2017年 度から企画を考え始め、デモンストレー ションを実施した。



【横須賀まちあるき】

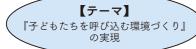
とうもんの里に初めて訪れる1年生を 中心に、とうもんの自然や文化を感じて もらうまちあるきを行なった。横須賀地 区で開催されていたイベントに参加した り、自分のお気に入りスポットを探した

2019年度の活動のテーマと目

とうもんの会では、とうもんの里を拠点にして、田園風景の保存と農村の伝統文化の継承などを目的とした活動をしている。 特に、次世代を担う子どもたちに向けて、農村や農業の魅力を伝える活動に力を注いでいるが、とうもんの里に訪れる子どもの数は多くな く、「子どもたちをとうもんの里に呼び込む環境づくり」が課題となっている。

子どもたちを呼び込むための環境をつくるためには「子どもたちはとうもんの里でどのようにして遊ぶのか」「子どもたちはどんなことを楽 しいと感じているのか」について知る必要がある。

今年度はその前提のもと、子どもたちのとうもんの里での遊びを理解するために子どもたちの遊びを観察した。





【今年度目標】

子どもたちはとうもんの里で 「どのように遊ぶのか」を 観察を通じて理解する

2019年度取り組んだことと成果

【イベントの企画・子ども達の観察】



七夕まつり

壁にチョークで自由に描くチョークアート

とうもんの里にある草花を摘んで、画用紙に貼りクレヨンで絵を描く草花アートを実施 どのような子どもがどのような絵を描くのか、壁に絵を描くという普段できない遊びが子どもに

とって魅力的だということを理解した。子どもたちが遊ぶ様子を撮る親が多いこともわかった。



地域創造学環

短冊、七夕飾り作りとチョークアートを実施

子どもの好きな色、短冊に書いた内容、年齢による行動の違い、かかった時間、そして親たちの 様子を理解した。また、チョークアートを見てとうもんの里に訪れた親子もいたため、視覚的に伝 わる遊びは子どもを惹きつける手段といえると感じた。



子どもたちが探検家となってとうもんの里の周りの自然を自由に観察してもらい、 その発見を「とうもんの里総合案内所」にてみんなで共有するというプロジェクト

イベント終了後、「また来たい!」と言ってもらうことができ、私たちの目的である「子どもが集 まるきっかけづくり」は達成できた。子どもは、学生や親に自分が見つけた物を逐一報告してきた ことから、発見や喜びを誰かと共有したいのだろう、と気づいた。



未就学児ととうもん図鑑の参加者を対象にクイズ・スポーツ・音楽ブースを作り、 子どもたちに自然に触れるきっかけとなる遊び場を提供

子どもたちは自分の知識や成果を誰かに伝えたい、他の子がやっていることを真似したい傾向に あるという事実を確認することができた。

想定外の遊び方をする子どもがいて、子どもの視点に立つ重要性を改めて感じた。

0

の

発

【観察結果の分析・まとめ】





①子どもは周りの子どもに影響され行動する

→キッズフェスで壁に絵を描いている他の子どもの様子を見て、 「私もやりたい!」と言って遊び始めた子どもや、とうもんの前を車で通りかかった 際、壁に絵が描かれている様子を発見し、遊びにきた親子がいた。

②親たちは、記録として、子どもの成果が残る遊びを求めている

→七夕祭りの際にチョークアートで遊んだ親子が一度は駐車場へ戻ったものの、 その後母親が子どもの描いた絵の写真を撮りにわざわざ戻ってきた。

③子どもは自分の見たもの、感じたことなどを誰かに伝えようとする

→とうもん図鑑で動植物を見つけた子どもたちが、学生や保護者へ見つけたものを逐 - 見せてきたことや、家や学校で身につけた折り紙やけん玉の技術を、遊びの中で披 露したがった。

④大人の時間と子どもの時間の感覚が異なる

→子どもがまだ遊びたいと言っていたにもかかわらず、家で待つ家族や、他の用事の ために子どもを遊ばせることなく帰ってしまった親子がいた。

これから取り組むべきこと

今年度の観察結果から、子どもたちを呼び込む魅力的な遊びには ①遊んだ様子が『かたち』として残る ②同伴者も楽しむことができる ③子どもの知識や腕前を発揮できる④親が撮影できる という4つがポイントになると考えた。

今後は、これらのポイントを満たす魅力的な遊び方の提案・実践とともに、 子どもたちが遊んでいる様子が周りの子どもたちに視覚的に伝わるような工夫 をし、「子どもが子どもを引き寄せる循環づくり」をしていきたい。



【そのための具体的活動予定】

- 親子で楽しむことのできるイベントの企画
- イベント開催時以外にも楽しむことのできる目を引く遊具の製作
- これまで行なったイベントの事実関与解釈の分析結果を活用し、ニーズを把握する
- メンバー1人1人の個性や得意分野を活かした活動をする







御前崎市

御前崎スポーツ振興プロジェクト~スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進~

メンバー

 (地域経営)
 2年 齋藤あい

 (地域共生)
 2年 中野希音

(アート&マネジメント) 1年 永島幸奈

(スポーツプロモーション) 2年 遠藤千懐、小西玲衣奈、萩原琢麻、平田直也、松井小春、

1年 島田朱諒、辻夢美、間下桃子

指導教員:○特任助教 川﨑和也、教授 水谷洋一、准教授 村田真一

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 御前崎市総務部企画政策課 御前崎市観光協会

株式会社東興

静岡カントリー浜岡コース&ホテル

ぶしゆ貝は効果

地域概要

御前崎市は、静岡市と浜松市のほぼ中間に位置する、静岡県内陸部 最南端の自治体で、人口はおよそ3万1000人である。

御前崎市には「浜岡砂丘」「御前埼灯台」のほか「マリンパーク御前崎」「海鮮なぶら市場」「渚の交番」「あらさわふる里公園」など、さまざまな名所・施設がある。また御前崎市は、年間の日照時間が国内で最も長いなど、地理的特徴等を活かしたスポーツも盛んで、ウィンドサーフィンの世界大会も開催されている。

御前崎市もまた人口流出に伴う人口減少、少子高齢化、地域経済の縮小・衰退などの問題が顕著である。2040年には住民の約4割が65歳

以上の高齢者になると予想され、その結果、御前崎市の第一次・第二次産業の担い手が不足し、さらに地域コミュニティの希薄化などの問題が懸念される。こうした課題が山積するなかで、御前崎市では、①「働く場所がたくさんあるまちづくり」、②「来てよし住んでよしのまちづくり」、③「安心して出産・子育てができるまちづくり」、④「いまあるひと・ものを活用した安全・安心なまちづくり」を基本目標にして、市民・行政・企業などが連携しながら、地域づくりに取り組んでいる。



「御前崎スポーツ振興プロジェクト」は、国と御前崎市との地方創生推進事業として2018年からスタートした事業である。市民・学生・企業・団体・行政などが連携し一体となって、御前崎市のスポーツ環境を活かして、交流人口の拡大、地域経済や市民活動の活性化、市民の健康増進などにつなげることを目標としている。

私たちは「御前崎スポーツ振興プロジェクト」と連携して、2018年10月から御前崎市でフィールドワークを行っている。実際に御前崎市を訪れて現地を視察したり、現地の方々から話を伺うだけでなく、学内で事前・事後学習を行いながら、これまで以下の活動に取り組んだ。



御前崎市役所で実施した意見交換会の様子 (2019年2月13日)

(1) 御前崎市にラグビーワールドカップ2019のレガシーを残すための企画

2019年のラグビーワールドカップ日本大会において、御前崎市にある「御前崎ネクスタフィールド」が南アフリカ、ジョージアのナショナルチームの公認キャンプ地に選ばれたことから、それを「レガシー」として御前崎市に残してゆくための企画を考えて提案した。

(2) 御前崎市に大学生を呼び込むための企画

静岡県内の大学生をターゲットにして、彼らを御前崎市に呼び込んで、御前崎市の魅力を知ってもらうなど、関係人口・交流人口のきっかけづくりとなる2つのイベントを企画した。

- ① 「夏」~ウィンドサーフィン大会×UMF
- ②「冬」~まちあるきノルディックウォーキング×キャンプ in 御前崎市

2019年度の活動のテーマと目標

今年度は「御前崎市に大学生を呼び込むための企画イベント」の実現に向けた取り組みを行った。自分たちの企画を実際に体験したり、関係者・専門家の方々から自分たち企画に対するアドバスをもらって、企画イベントの内容を再度検討するとともに、御前崎市で行われるイベントに参加してその手伝いをしたり、自分たちで小さなイベントを開催することで、イベントの運営のノウハウを実践的に学んだりすることを今年度の活動の目標とした。



------御前埼灯台にて(2019年11月14日)

2019年度取り組んだことと成果

(1) マリンスポーツフェスタ (2019年7月14日)

「マリンスポーツフェスタ」は、地域住民たちの海に対する理解を深める場と機会を提供することを目的として、毎年、御前崎港マリーナで開催される地域密着型の海洋スポーツ・イベントである。私たちはこのイベントに参加し、カヌー、サップ、水上バイク、バナナボートを体験し、マリンスポーツの魅力を感じることができた。また、イベントスタッフとしてお手伝いもし、私たちが企画しているイベントを実現するうえで必要となるノウハウや経験を身につけることができた。





地域創造学環

マリンスポーツフェスタ

00450

(2) 御前崎市合宿型フィールドワーク (2019年9月25日・26日)

私たちが企画している「御前崎市に大学生を呼び込むためのイベント」を実現するために1 泊2日の現地実習を行った。御前崎市内を自転車でめぐったり、私たちが企画したイベントの 専門家を訪ねてさまざまなアドバイスをいただいた。また、私たちの企画イベントの目的は、 若者たちが御前崎市に移住定住するためのきっかけ作りとすることにあることから、実際に県 外から御前崎市に移住定住された方にもインタビューを行った。御前崎市ならではの自然や食 べ物の魅力を知ることができただけでなく、それまで頭の中だけで考えていた自分たちの企画 イベントを現実的に見直す機会となった。





御前崎市で実施した1泊2日のフィールドワーク

(3) [U-14御前崎ネクスタカップ2019] でのイベントの実施 (2019年12月29日)

私たちの企画イベントを実施する前に、まず自分たちで小さなイベントを企画してみようと、今回で2回目の開催をとなる「U-14御前崎ネクスタカップ」において、豚汁の提供とキックターゲットの企画と運営を行った。全国からやって来る中学生の選手たちにとって、御前崎市での滞在が良い思い出となるように、これらの企画を考えた。自分たちで手作りしたキックターゲットでは高得点を目指して取り組む選手がほとんどで、大いに盛り上がった。大会の開催時期が12月で冷え込むことが予想されたため、会場を訪れた方に体を温めてもらいたいという想いで、豚汁を提供することにした。たくさんの「おいしい」という声と笑顔をいただくことの喜びを知った。自分たちで企画したものが「形」となった初めてのイベントとなった。

この他にも「御前崎市に呼び込むためのイベント」を実現するために伊豆の国市に 視察に訪れて、その協力の依頼を行ったり、サイクリングマップ作成のために御前崎 市内の各所をフィールドワークした。またこれらの活動と平行して、企画しているイ ベントについて、御前崎市役所、株式会社東興、御前崎市観光協会の方々たちと何度 も協議し、そのブラッシュアップに努めた。

2019年度の活動を通して、イベントの企画や運営について実践的に学ぶことができた。同時に、イベントを企画・運営することの大変さや難しさとともに、企画が実現したときの喜びや達成感も味わうことができた。





U-14御前崎ネクスタカップ2019

これから取り組むべきこと

2020年度は2年間にわたって準備をしてきた「御前崎市に大学生を呼び込むためのイベント」を実現する年となる。御前崎市を訪れる観光客が少ない9月にイベントを実施する。大学生たちに御前崎市の魅力を感じてもらい、御前崎市との関わり・交流のためのきっかけとしたい。また、私たちも御前崎市のさらなる魅力を自ら発見し、県内外に向けて発信する努力を続けてゆきたい。



松崎町 商店街

なまこ壁が残る松崎町商店街のにぎわい創出

メンバー (地域経営)

3年 長田結衣、2年 中西花、宮本彩名、

1 年 金瀧莽牛 菅野恒

(地域共生) 3年 望月南緒、2年 大谷知、1年 海老名香凜、辻村圭吾

(アート&マネジメント) 3年 柚木直里奈

指導教員:○准教授 牛塲智、教授 阿部耕也、教授 杉山康司、准教授 皆田潔

※○は責任教員

(スポーツプロモーション) 3年 黒墨世菜

フィールドワーク実施協力者 松崎町企画観光課 松崎町総務課

静岡県立松崎高等学校

~ 『花とロマンの里』松崎町~

松崎町は静大から車で約3時間半、伊豆半島南西部の海岸沿いに位置している。

春には美しい花々が田んぼを彩り、通りはなまこ壁の建造物が作り出すノスタル ジックな空間に包まれた奥ゆかしい地域である。

「日本で最も美しい村」連合(the most beautiful villages in japan)にも加盟し ており、豊かな自然や歴史文化があふれている。それは「石部の棚田の原風景」「紺 碧の海|「波の音|「国指定重要文化財の「岩科学校||「塩漬けの桜葉|「海の幸| など であり、様々な魅力が詰まった味わい深い地域といえる。



牛原山から見た松崎町

これまでの活動

●《商店街調査》

商店街にある店舗のラベリング、聞き ることができた。

●《イベントへの参加》

棚田で行われるあかり展や棚田フェス、 するまちの人の様子が伝わってきた。

●《松崎町の中高生との交流》

松崎中学校、松崎高校の生徒の皆さん 取り調査を実施。まずは松崎町で静大生 秋祭りなど、松崎町の様々なイベントに とワークショップを行なった。「大学生っ が活動していることを認識してもらうこ 参加した。これらには松崎町内外から多 てどんな牛活をしているの? | や「理想 と、そして今後フィールドワークに活用 くの人たちが参加している。その活気に の松崎町(商店街)について考えてみよ できる資料を作ることを目的に活動へ取 満ちた様子は、普段とは一味も二味も違 う!」といったテーマで実施した。ワー り組んだ。調査によって、今まで何気なうように感じられた。イベントを通して、クショップをすることで、地域の若い世 く歩いてきた商店街の具体的な姿を捉え 自然や伝統、人々との心の交流を大切に 代が自分の住む地域についてどのように 考えているかがわかった。

2019年度の活動のテーマと目標

私たちのフィールドワークのテーマは『**好きを咲かせる**』です。

まち歩きをしているとしばしば聞く「松崎なんて」という声。しかし私 たちは通うたびに松崎町の良さに惹かれています。このギャップを埋めた い。松崎町の魅力を実感してほしい。そんな気持ちからこのテーマは生ま れました。

私たちの活動が「水」となり、松崎町を見つめる視線が「光」となって 作用することで、魅力や素材にあふれる松崎町という「土」を、松崎町が 好きだという気持ちでいっぱいにしたい。

まちで暮らす人、まちに訪れる人の心に松崎町を好きだという気持ちを 咲かせてみたい。テーマにはこのような想いが込められています。

『好きを咲かせる』の実現に向け、まずは松崎町の人々を対象に地元にさ らに誇りを感じてもらえるような取り組みを計画した。また、まちには教 育上の課題もある。それは地域内に大学がないことから、中高生にとって 「大学」や「大学生」が身近な存在でなく、将来の選択肢としてイメージが 難しいというものである。そこで、地域の若い世代との様々な連携を図る ことで、その解決に取り組んだ。



テーマイメージ

2019年度取り組んだことと成果

●《松崎高校文化祭》

以前から交流のある松崎高校の文化祭に参加した。静大ブースを設け、地域住民参加型を 意識して3つの展示を行なった。

①松崎町おすすめスポットのマップ作成

まちの人たちだからこそわかる地域の魅力を教えてもらうことで、私たちにとっては新たな 魅力の発見に、まちの人たちにとっては魅力の再認識の場となった。文化祭後は縮小版や Googleマップの作成をし、活用をしている。

② 「私の気持ち」紹介

松崎町の今を生きる人たちの様々な気持ちと表情をスケッチブック、チェキを用いて可視化 を図った。写真というツールで交流することで、私たちとまちの人たちとの心の距離が近づ き、文化祭という非日常の楽しさが共有できた。

③静岡大学地域創造学環、松崎町フィールドワーク紹介

私たちの活動を直接まちの人たちに説明することができ、エールをもらえた。

●《松崎町内店舗調査》

前年度から行なっていた店舗の聞き取り調査を、今年度は商店街の全店舗を対象とするも のではなく、私たちがピックアップした気になる商店を調査するという形で継続した。高校 生と一緒に調査することで、まちの人たちと高校生との交流が生まれ、店主からより詳細な 情報を得られた。また、高校生にも地元の商店に目を向けてもらうきっかけとなった。店主 の想いや松崎町の移り変わりなど、お客さんとしてお店に訪れるだけでは知り得ないことを お話ししてもらえた。店舗調査を通して豊かな自然や歴史などの地域資源に加えて、商店や 店主の方々もまちの大きな魅力の一つであることが発見できた。調査した情報は現在行政と 一緒に計画中のパンフレットに活用する予定である。

●《情報発信(継続中)》

松崎町の魅力を広く外に向けて発信するため、まず現在の情報発信を行なっている主体へ インタビュー調査をし、現状と課題を確認した。その情報を踏まえて私たちだからこそでき る情報発信とは何かを考え、

①「松崎町PRコンテスト」の開催

②観光パンフレットの作成

の2つに取り組むことでさらなる魅力発信を図ることになった。コンテストは、松崎町内外 からまちをPRするための写真や動画を募集する形で行なう。そこでまず、動画やポスターの 作成によりコンテストそのものを宣伝し、多くの人の参加を呼びかけていく。パンフレット は今後、一年をかけて取材、編集していく予定である。どちらの企画も行政などと協力する ことで実現を目指していく。



地域創造学環

文化祭の様子(1)



文化祭の様子②



店舗調査の様子



PRコンテストの宣伝写真

これから取り組むべきこと

これまで私たちは『好きを咲かせる』というテーマを掲げ、松崎町内の人々に対してまちの魅力を実感してもらえるよう な取り組みをしてきた。これからはそれに加えて、「松崎町を知らない人や訪れたことのない人の心にも松崎町が好きだという 気持ちを咲かせよう」という思いも持って活動していきたい。

そこで上記の「情報発信」を活動の軸として、PRコンテストやパンフレット作成に取り組んでいく。その際に、若者かつ よそ者という私たちの視点を牛かすこと、松崎町を知らない人へのアピールだけでなくまちの人たちやリピーターに対しても、 まちの魅力の再発見を促すことを意識していく。

また、店舗調査やワークショップ等の活動に積極的に参加してくださった松崎高校の皆様とのつながりを大切にし、フィー ルドワークにご協力いただいていることへの感謝も込めて、2020年度松崎高校文化祭でのブース出展を予定している。以下は 2020年度前期の活動計画である。

•パンフレット、PRコンテスト、文化祭の打ち合わせ

•文化祭への参加、パンフレット取材開始、 PRコンテスト募集開始

•パンフレット取材、PRコンテスト結果発表



松崎町 観光と防災

防災と観光の両立

メンバー

(地域環境・防災) 3年 勝谷勇介

2年 平江夏樹

1年 更家優和、那須野智大

(アート&マネジメント) 3年 中村実李

指導教員:○准教授 原田賢治、教授 岩田孝仁

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 松崎町企画観光課 松崎町総務課 静岡県立松崎高等学校

地域概要

伊豆半島南西部の海沿いに位置する松崎町は、 「日本で最も美しい村連合」に加盟しており、 なまこ壁、棚田や海岸などの美しい景観を持つことから、 観光地として有名な港町である。

しかし、海岸沿いに位置するため、南海トラフ巨大地震発生時には 約7分で最大15メートルの津波に襲われると想定されており、 その対策・アフターケアなどが地域課題となっている。 (松崎町 HP『松崎町の津波高等の概要』より)

石部の棚田 (松崎町 HP より) 松崎町

マスコット

『まっちー』

これまでの活動

防災訓練実施

松崎町西区の津波避難タワーへ避難 する地区において、狭隘道路の封鎖・タワー の設備の紹介。

狙い・災害時を意識した行動の促進と、防災施 設の把握により災害時の住民の主体的な対応。

周辺観光地の調査

南伊豆や西伊豆の主要観光地の調査

伊豆半島における松崎町の観光地としての立ち位 置を調査・考察。

実施結果

◇ 防災施設や用具の使い方を把握してい ない住民が多い。

そのため、緊急時に誰でも使える ような普及活動を行う必要性 がある。

◇松崎の魅力は、のどかな雰囲

気。街全体が一つの観光施設である。

一方、街全体のイメージ戦略の上で、今後建設される 予定の防波堤による景観の阻害について考えていく必 要性がある。

2019年度の活動のテーマと目標

将来を担う子供たちと共に活動し、 町の防災について考える機会を与える

住民の大半を占める高齢者の方々を守る防災を考える

3 観光客に対する防災・バリアフリー

2019年度取り組んだことと成果

理難訓練の見学 一部地区で行われる避難訓練の見学。

住民の参加率や避難訓練での様子を観察し、そこ から課題や改善点を見つける。 加している姿が印象的だった。また、住民全員で 地区の危険な箇所を話し合っており、非常に効果 的である。その中で、地域の過半数を占める高齢 者の避難方法の改善は一つの課題。

◆東京から来た観光客4人にイン

◆住民の方々の参加率が非常に高く、意欲的に参

2 ビアリング調査 松崎町海岸沿いにて観光客にインタ ビューを実施。

松崎町における観光面での課題を調査する。

タビュー (同行者に身体障害者)。 松崎の観光施設や海岸沿いは設備 が不十分であり、高齢者や障害者 には観光しにくい。バリアフリー 化を早急に行うべきだろう。

◆松崎の小中高校生たちは学校の授業やまち歩きなどで地区の危険な箇所を把握していた。避難訓練へも積極的に参加し、防災への意識が高い。町の避難訓練についてはマンネリ化が進んでいるため、AED講習の実施など新たな取り組みにも意欲的であった。

3 地区長と話し合い

公会堂にて3地区長と話し合い。

普段、松崎町の住民がどのように防災に関わって いるのか、または関心があるのか調査する。

これから取り組むべきこと

町内小学生に向けた 防災マップ作製 ワークショップ

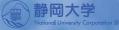
AED 講習の実施

高齢者や町外から来る 人に向けた防災を 考える

- ▶未来を担う子供たちに、身近に防災を感じてもらう。また、実施した後、自 主的にマップづくりをしたくなるように、ワークショップに楽しめる工夫を施 す(キャラクターを作らせる・作ったマップを下敷きにして配布するなど)
- ◆通常の町の避難訓練ではただ避難場所に集合して終わりだが、実際の災害時には、例えば被災者に AED を使用するシーンもあるだろう。訓練時から AED を実際に使い、その使い方を学んでもらう。
- ◆高齢者は足腰が弱く、避難に時間がかかる。避難用アイテムや使用方法を積極 的にリサーチし、提案したい。観光客に対しては、看板の塗り替え・デザイン変更 (バリアフリー面ではユニバーサルデザインを取り入れつつ)を検討していきたい。

地域創造学環 (本語)





新しい観光スタイルの発掘・創出プロジェクト

メンバー (地域経営) フィールドワーク宝施協力者

3年 池田橘平、小山莉乃、増田彩香、2年 土橋もも、星野海輝也、 NPO法人ローカルデザインネットワーク

1年 大石竜弘、増田実奈 (アート&マネジメント) 3年 梅田留奈、2年 河村清加

(スポーツプロモーション) 1年 内藤由里子

指導教員:○教授 阿部耕也、准教授 皆田潔

※○は責任教員

地域概要

東伊豆町・稲取は伊豆半島南東部に位置する漁村であり、金目鯛などの食や景色、温泉などを活用した観光を産業の主軸としている地域である。

町には伊豆急行線の伊豆稲取駅があり、アクセスの良さから東京などから観光に来る人々も多くいる。

つるし雛発祥の地として有名であり、毎年1月20日から3月31日にかけて「雛のつるし飾りまつり」が開催され、この時期は特に多くの人々が訪れる。

受け入れ先であるNPO法人ローカルデザインネットワーク(LDN)は 東伊豆町に拠点を置き東京と東伊豆、社会と学生を繋げる活動を行なっ ている。



写真1…高台から眺める稲取の街

これまでの活動

稲取の魅力を知ってもらうことを目的とした様々なイベントを開催することでより、多くの人々が稲取を好きになってもらえるような活動をしてきた。

○昨年度行なった主な活動

東伊豆町では昨年度、雛のつるし飾りにちなんで「雛フェス」というイベントを初めて開催した。そこで昨年度は 主に雛フェス開催に向けた取り組みとしてハーバリウム製作体験とライブペイントの2つの企画・出店を行なった。

「稲取を小瓶に詰めて持ち帰ってもらう」というコンセプトを元に、若い女性をターゲットにしたハーバリウム製作体験を行なった。

【ライブペイント】

コンセプトは「東伊豆町の人と観光客とを巻き込んでひとつの形に残す」とし、多くの人々に下書きや色ぬりなどを協力してもらうことで一つの大きなパネルを完成させた。



写真2…ハーバリウム作りワークショップの様子



写真3…ライブペイント完成品

2019年度の活動のテーマと目標

人が行きかう稲取を実現する。→「UCHIRA」を増やすこと。 UCHIRAとは…稲取を好きな人、稲取に興味を持っている人、私たちの仲間のこと。 →わたしたちの役割はコンテンツを生み出すことによって人と稲取をつなぐこと。

地域創造学環

2019年度取り組んだことと成果

○ロゲイニング風RPG「INATORI QUEST」

稲取は伊豆稲取駅から旅館街まで少し距離があるため、旅館は駅からシャトルバスを走らせて宿泊客が移動しやすい環境を整えている。しかしそのため、駅を利用する観光客が稲取の街を直接歩くという機会が少なくなってしまっている。そこで稲取の街を利用したロゲイニング大会を開催することによって稲取の魅力をより知ってもらえるのではないかと考えた。

一般的に行われているロゲイニングではなくRPGという要素を入れることにより、参加者により楽しんでもらうための工夫をした。 →参加者からは好評であり、地元の人の良さや景色など稲取の魅力を感じてもらうことができた。



写真4…ロゲイニングイベントで稲取を走り回る 参加者の方々

○第2回雛フェスに向けての取り組み

昨年度初開催となった雛フェスが今年度も開催される予定だった(中止となってしまった)ため、今回も静岡大学フィールドワークとして雛フェスに向けての企画を行なっていた。

【ライブペイント】

昨年度行なったライブペイントを今年度も行う予定であった。

【フォトフレーム作りワークショップ】

昨年度行われたハーバリウム製作体験を元に今回はつるし雛の製作に使われる絹を利用したフォトフレームづくりのワークショップを地元でものづくりの活動を行なっているNPO法人の方と合同で行おうとしていた。

これから取り組むべきこと



写真5…稲取で有名な雛のつるしかざり

○人が行き交う稲取を実現させるために

• UCHIRAを増やす

UCHIRAとは、地元稲取に住んでいる人々を含め、稲取のことが 好きな人のことを言う

→まずは地元の人々に稲取のことを好きになってもらいたい

地元の人々に焦点を置いた活動もしていきたい

• 地元の人々のニーズを知る

「UCHIRA」の意識を持っている地元の人々が静岡大学の学生に対してどういったことに取り組んで欲しいのかというのを知る必要がある。

インタビュー調査や地元の人々とコミュニケーションが 取れる活動をしたい

【これからの活動目標】

「UCHIWA」の存在を知る、増やす

「UCHIWA」とは、「UCHIRA」の中でも主に地元で生活や活動している人のこと。

伊豆半島ジオパーク(保全と防災)

伊豆半島ジオパークにおける環境保全と防災対策

メンハー (地域共生) 1年 西原悠人 (地域環境・防災) 3年 上田啓瑚、2年 福山めぐみ 指導教員:○教授 小山眞人、特任准教授 山本隆太 ※○は責任教員 フィールドワーク実施協力者 伊豆半島ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会 西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会

地域概要

「見慣れた地形・風景には、すべて意味がある」―伊豆半島ジオパークは、伊豆半島の特徴的な自然とそこに育まれた地域社会のつながりを可視化する場である。ジオパークとは、地域の自然遺産を通して大地(ジオ)、生態系(エコ)、歴史・文化(ヒト)の3つのつながりをより深く理解し、それらを観光や教育などに活かすことによって地域社会の持続的発展を促すプログラムである。

また、過去たびたび自然災害の被災地となってきた伊豆半島においては、地域の防災への貢献もジオパークの重要な課題のひとつである。

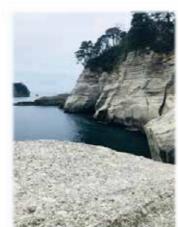
これまでの活動

(1) ダオサイト保全のための環境負荷センサーの開発

ジオパークでは、見どころとなるジオサイトを指定しているが、ジオサイトの数が多く、電源のない山奥に位置する場合も多いため、環境にかかる負荷の実態把握はできていなかった。そのため、安価なマイクロコンピュータ制御の電子基板モジュール(Arduino)、超音波距離センサー、太陽光パネルを組み合わせ、訪れる人や動物の往来を定量的に計測・記録するシステムを開発した。

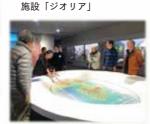
(2) 防災情報共有Webサイトの作成

国立研究開発法人防災科学技術研究所(以下、防災科研)が開発・公開しているWebプラットフォーム「地域防災Web」の提供するWebシステム「eコミマップ」上に、西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会により集められた危険個所等の情報を入力し、いつどこでも容易に参照・更新できる西伊豆地域の防災情報共有サイトを作成した。



↓伊豆半島ジオパーク中央拠点

←ジオサイト「堂ヶ島 | の風景





↑環境負荷センサーの制御ユニット →環境負荷センサーの調整作業の様子





↑西伊豆地域の防災情報共有サイトのトップページ

2019年度の活動のテーマと目標

「地域と連携した津波防災まち歩きマップの電子化と防災情報共有」

伊豆半島西岸の西伊豆地域では、これまで西伊豆町災害ボランティアコーディネーター連絡会が、伊豆半島ジオパーク推進協議会と連携して防災まち歩きを開催してきた。しかし、そこで得られた避難の妨げとなる危険個所等の防災情報は、地域住民に十分共有されていない状況にある。また、こうした防災情報は時々刻々と変化するため、素早く容易に情報の修正・更新を可能とするシステムが必要である。そこで私たちは、2018年度に作成した防災情報共有Webサイトの防災情報を集約するための電子地図を用い、登録作業の体験と使用方法についての調査を行なった。

地域創造学環

2019年度取り組んだことと成果

防災情報共有のための電子地図(図1)を用いて、静岡県立松崎 高等学校の生徒7名(2019年9月)と仁科地区の地域住民11名(2019年11月)、田子地区の地域住民4名(2020年2月)を対象に、西伊豆 町の仁科地区および田子地区内で津波防災まち歩きと意見交換会を 実施した。

最初に電子地図の使用方法を説明した後、津波防災まち歩きを実施し、災害時において危険と思われる個所や、役立つと思われるものを発見した際には、それらを撮影し、その場で電子地図への登録作業を行った。ただし、田子地区については実施日が雨天だったため、室内で登録作業のみを体験してもらった。その後、登録結果を電子地図上で確認した上で、意見交換および質問紙調査を実施した。

図1 eコミマップを用いた防災情報共有のための電子地図

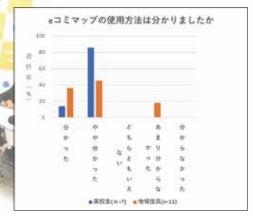


図2 集計結果:使用方法の理解

(1) 質問紙調査

両回とも参加者全員から回答を得た。使用方法については、高校生の多くは理解できたとする一方で、スマホの使用に不慣れな高齢者が参加した地域住民からは「あまり分からなかった」や「やや分かりにくい」という意見が出された(図2)。使用感については、高校生の多くは使いやすいと感じたが、地域住民の意見は分かれた(図3)。自ら使用できると思うかについては、高校生及び地域住民の多くが「思う」、「やや思う」と回答した一方で、「あまり思わない」と回答した地域住民もいた(図4)。

(2)自由記述・意見交換

高校生からは「現在地を表示する方法が分かりにくい」、「登録時に指定する項目の種類がもっとあった方が良い」などの意見が出た。また、地域住民からは「災害発生時の避難所の情報や通行止めの情報をリアルタイムに入れられるようにすると良い」、「時刻や簡単なコメントが入れられると良い」などの改善を要望する意見や、「写真で登録できるのが分かりやすく良い」、「すぐに情報が登録でき、自分の撮った写真が載るのが楽しい」などの肯定的な感想も出された。

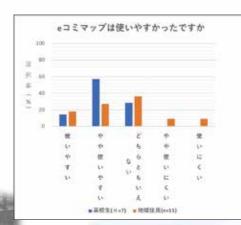


図3 集計結果:使いやすさ

eコミマップは自分にも使用できると思いますか 100 (4) (5) (5) (6) (7) (7) (8) (8) (8) (9) (9) (9) (10)

図4 集計結果:自分でも使えるか

これから取り組むべきこと

操作や操作方法の説明に課題があることが分かった一方で、自ら使用可能と考える人も一定数存在し、高齢者にも扱えそうなシステムであることが分かった。より容易に使用可能とするためのシステムの変更・更新を図る必要がある。今後は、地区の区長や防災委員、ボランティア関係者等に協力を得ながら実践を重ねて、有用性や利便性の周知につとめたい。そして、将来的には使用に慣れた住民へ継続的な運営を引き継ぎたいと考えている。

伊豆半島ジオパーク(教育)

伊豆半島ジオパークの持続可能な開発と教育(SDGs/ESD)の推進

メンバー (地域経営)

3年 中山理紗、1年 北嶋泰成 3年 西郷慶亭 矢ケ部五朗

(地域共生)

(アート&マネジメント) 3年 森本和花

(スポーツプロモーション) 3年 内村仁志、岡部由佳、鈴木麻央、2年 神谷拓実、

| IzuPeninsula GP | Color

1年 永井結登

指導教員:○教授 小山眞人、特任准教授 山本隆太

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 伊豆半島ジオパーク推進協議会 伊豆半島ジオガイド協会

ジオパークをしりたい!

伊豆半島ジオパーク ています。

↑伊豆稲取の郷土料理

みしまコロッケ

↑沼津市・御浜岬



伊豆半島ジオパークとは?

伊豆半島ジオパークは豊かな 大地や自然環境を保護しつつ、 教育や観光に活用することで持

続可能な社会への転換を目指し

今ほど交通の便が発達してお

らず、情報技術が発展していな

かった頃は、その土地で採れた

ものを活かした料理を、地域で

地域にはその土地ならではの

気候や土壌、標高、動植物の生

熊系など、様々な要因がありま

す。郷土料理は土地の特性を生

かつて、はるかかなたの南の

海底にあった火山が、プレート

の動きによって運ばれて日本列

島に衝突。伊豆半島の大地では、

ジオパークは豊かな大地や環

境を保護しつつ、教育や観光に

活用することで持続可能な社会

教育はジオパークの活動の3

本柱の一つ。SDGsの「誰も取

り残さない」という基本概念を

ふまえ、教育を提案します。VR

もっとみる

動画の教育活動の提案など。

いまも火山活動が活発です。

持続可能な開発

を目指しています。

伊豆半島の誕生?成長?

郷土料理はなぜそこに?

受け継いできたからです。

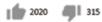
なぜその土地?

↑三島西麓野菜 かした食文化です。



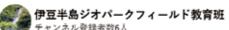


楽寿園(三島市)でのFWの様子 19.629回視聴・2019/12/2









チャンネル登録

静岡県東部に位置する伊豆半島には、西伊豆や南伊豆などの風光明媚な観光 名所や、修善寺や伊東などの歴史ある温泉地がある一方、人口流出は静岡県内 でトップです。そんな伊豆半島では、15市町が協力して伊豆半島ジオパークを 運営しています。2018年4月にはユネスコ世界ジオパークに認定されました。

私たちのグループは、2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発 目標」(SDGs)の「誰一人取り残さない」という理念に基づき、伊豆半島ジオ パークにおいて3つのプロジェクトを展開しています。

すべての人にジオパークでの質の高い教育を届けるためにVR (Virtual Reality: 仮想現実)の活用を提案する「VR LEARNING LAB」、郷土料理をテーマとして 食と地域の持続可能性を伝える「食×SDGsワークショップ」、大学生視点でジ オパークを考える「静大生が考えるジオパーク入門ツアー」の3つです。

こうしたSDGsの活動を基に毎年、朝日新聞が主催している大学SDGs ACTION! AWARDSに参加しています。

これまでの活動



• ジオパークについて学習

• ジオガイドとのワークショップ

• パンフレットづくり



- 30 -

• SDGs肉まん開発

・ジオパン開発、販売支援

・郷土料理について学習

2019年度の活動のテーマと目標

地域住民との連携

「伊豆半島ジオパーク」の名前 を聞いたことがあってもよく知 らない人がいる。



ジオパーク…? 名前は知ってるよ。()



面白そうだけど、 専門用語は…



教育教材の専門性が高い

地域創造学環

ジオパークに関する出版物は 多いが、専門性が高いものが多

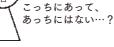
切り口が少ない

地質以外のアプローチがあり、 取り組みが始まっているがまだ これから。

地域格差

15市町ではジオパークの認知 度、ビジターセンター等の施設 の有無に差がある。





地層には興味ないや… 美味しいもの食べよ。

BEXTERMINE/DSIP

2019年度取り組んだことと成果

「VR LEARNING LAB」PIC:鈴木麻央

伊豆半島ジオパークのジオサイトを360°カメラで撮影し、VR教材化するというプロ ジェクト。SDGsの「誰も取り残さない」という基本概念をふまえ、360°VR動画の教 育活用を進めてきた。 〈活動意義〉

野外でのジオパーク教育はこれまでも行われてきたが、広大な面積を持つ伊豆半島 内ではバスや電車での移動が必要で、頻繁にジオサイトを見学できないという課題が ある。また、特別な支援を必要とする生徒など、ジオサイト見学が困難であった児童 生徒の学習機会を確保する必要がある。 さらに、事前学習として予め教室でVRを体 験し、調べる点を明らかにした上で現地で的を絞って観察するという探究学習にも展 開できるなど、用途は幅広い。

〈活動内容と成果〉

これまでに三島ジオサイトや西伊豆ジオサイトを撮影した。三島ジオサイトはすで にYouTubeに公開している。三島ジオサイトについては、VR動画のQRコードを掲載 したパンフレット制作も行い、教育利用だけでなく、観光活用も視野に入れた展開を 行っている。

伊豆半島ジオパーク学術研究発表会や他プロジェクトで活用・発表予 定であったが、度重なる延期・中止により正式な報告ができていないた め動画による報告を公開している。このプロジェクトの報告動画は右OR コードから閲覧可能である。 今後も撮影を続けつつ、教育現場での実証試験を目指す。





「静大生が考えるジオパーク入門ツアー」PIC:矢ケ部五朗

大学生である自分たちの視点や感性を活かし、ジオパークを 知らない大学生に向けた「入門ツアー」を実施した。

大学生ならではの新しい視点や柔らかい発想、言葉遣いを活 かして、気軽にジオパークツアーを体験してもらい、伊豆半島 ジオパークを知ってもらうきっかけを作るコンセプト。 〈活動内容と成果〉

大学生ガイドにより三島ジオサ イトをジオツアーでめぐり、道中 に見つけたもののつながりを探る ワークショップを実施。 一部、外 部に向けた情報発信に課題が残っ たが、ツアー内容の改善・更新を しながら、新たなツアーコンテン ツの制作を進める。



↑ッアーの様子

「食×SDGsワークショップ」PIC:岡部由佳

地域活性化で取り組まれることの多い地元産品のブランディ ング化。地元特産品を使った食品開発を考えることを通じて、 食からジオパークを知ってもらうとともに、地域の持続可能性 を考えるワークショップを実施した。

食という身近な題材を切り口としながら、伊豆半島ジオパー クへと触れることで、ジオパークとSDGsの結び付きをわかり やすくする。

〈活動内容と成果〉

- 31 -

沼津商業高校開発の「ジオパン」 についての市場調査支援や、戸田塩 の会へのヒアリング調査を行った。 伊豆半島内の郷土料理と、商品開発 によって生まれた「新・郷土料理」を リストアップ、マッピングを行った。



これから取り組むべきこと

それぞれのプロジェクトで提案したものを、伊豆半島の中に向けて発信をしていく。 その際には、伊豆半島内の他フィールドや他組織と協力し、つながりをつくっていくこ とも、重要な課題であると考えている。さらに、ESDやSDGsのプログラムを活用して、 全国に向けて発表・実施していく。

これからは、次の世代が新たな企画を提案していくが、持続可能な開発に向けた取り 組みとなることを期待している。

SUSTAINABLE GOALS













県営団地

県営住宅団地における居場所づくりと地域福祉資源のネットワーキング

メンバー

(地域共生) 2年 大塚紗菜、竹村定朔、丹羽唯人、1年 中村文

(地域環境・防災) 3年 遠藤爽、河村拓斗、櫻木哲朗

(アート&マネジメント) 3年 浦田紗季 (スポーツプロモーション) 1年 仲原凪歩

指導教員: ○准教授 山本崇記、准教授 祝原豊、准教授 須藤智

※○は責任教員

フィールドワーク実施協力者 社会福祉法人静岡県社会福祉協議会 社会福祉法人静岡市社会福祉協議会

Hth Latt HIV 255

県営団地とは、県が運営を行っている公営団地のことである。現在活動している静岡市清水区の吉川団地は、静岡大学から車で30分の場所にある。入居者数は260人、高齢化率45%と高い。今日、高齢者の孤独死や買い物難民などが各地で問題となっており、県営団地は特にその点が課題である。吉川団地では、子どもが少なく自治活動の少なさも存在し、フィールドワークを通じて、住民の居場所作りを試みている。



吉川団地

これまでの活動

①地域アセスメント(2018年9月)

地域アセスメントとは、地域内外の方々と話し合いながら、地域の特性や社会資源、地域のニーズなどを把握、分析することで、詳しい地域の現状を知る勉強会である。社会福祉協議会の主催で吉川団地を対象に行われ、協力した。

②でん伝体操

でん伝体操とは、静岡市による高齢者向けの介護予防体操であり、吉川団地では、最も住民に根付いた取り組みである。私たち学生も、住民との信頼関係の形成や参与観察の入り口として、一緒に体操を行ってきた。

③お花の会

お花の会は、団地の花壇や空き地に花を植える事で、団地を明るくすることを目的としている。

④折り紙の会

 $5\sim6$ 人程度が参加しており、でん伝体操の参加者の中から参加を募っている。

⑤非常食試食会(2019年2月)

地震などの災害がおこった際に、一番問題になりやすい食糧問題に対して、 非常食の存在とその美味しさを知ってもらうため、アレルギー問題やローリングストックについて学ぶ、学生発案の非常食試食会を実施し、大変な好評 を得た。

【取り組みのまとめ】

2018年度は既存の取り組みに参加しながら、学生主体の居場所作りを考案し、実施するところまでたどりついた。住民と学生が一緒になって、居場所作りの「成功体験」を重ね、自治の機運を高めていくことが、次年度の目標となった。



②でんでん体操



④折り紙の会



⑤非常食試食会

2019年度の活動のテーマと目標

• = = =

"団地×大学生"を通じた居場所づくり。

<u>・目標</u>

住民と学生の協働による多様な居場所を創出し、住民自治をサポートする。

2019年度取り組んだことと成果

①映画会(2019年4月)

高齢者向けのイベントとしてでん伝体操の後、映画上映会を開いた。この会の宣伝のためにでん伝体操での紹介や直前の団地内放送を行ったおかげもあり、17名の方が参加してくれ、非常に楽しい会にすることができた。普段、でん伝体操に参加していない男性陣も来られ、新たな参加層を得ただけでなく、興味を持った子どもたちとも接点ができ、③のイベントに繋がった。

②カラオケ大会 (2019年7月)

カラオケ大会には多くの参加者が訪れ、非常によいイベントになった。直前の団地内放送やこの日のために発行した「きっかわ日和」という広報誌などを活用して宣伝を行ったおかげか、終始歌声が絶えない大変盛り上がったイベントとなった。近くの人と談笑したりデュエットしたりする姿も見られ、交流の場としての効果も見えた。参加者の方からは次回の開催を望まれる声も上がっており、継続イベントとしても検討していきたい。

③子ども向けイベント (2019年10月・12月)

「高齢者向けだけではなく子ども向けのイベントも行ってほしい」という要望を受けて、子ども向けのイベントを2回行った。第一回目はハロウィンパーティー、第二回目はクリスマスパーティーを行い、子どもたちや親御さんたちとの交流を深めることができた。団地には子どもの数が少なく、子ども会を運営することが難しくなってしまい、子どもたちが楽しめるイベントがあまり行えないことや、自治連合会の運動会に団地として参加しづらいことを知った私たちが、今まで対象としていた高齢者の方々だけではなく、子どもたち向けの居場所づくりを実現した形となった。

④しずおか自治取組発表会@駿河区(2020年1月)

しずおか自治取組発表会とは、静岡市内の自治やまちづくりを行っている様々な組織の人々が集まり、自分たちの組織の取り組みを発表し、市内という同じ条件の下で学びあう場である。この場を通じて私たちも吉川団地での取り組みのヒントを得ることができた。例えば、より住民たちの求めている取り組みを行えるように住民の方々にアンケートを行ったり、イベントの参加率を上げるために住民同士の横のつながりを利用して互いに情報を伝えあってもらうなど、活動をより効果的なものにするための工夫を学ぶことができ、今後に生かしたいアイデアを得た。



地域創造学環

③子供向けイベント ハロウィンパーティー:左、クリスマスパーティー:右





④しずおか自治取組発表会@駿河消防署

これから取り組むべきこと

今後に取り組むべきこととして、改めて、住民のニーズや意識などを把握する実態調査を実施したいと考えている。私たちが、団地で出会っている人たち以外にも、なかなか、イベントに出てこれなかったり、ニーズ把握ができていなかったりする方々もいる。吉川団地を含む有度地区で行われた地域福祉に関するアンケート調査(2017年)でも、吉川団地の回答率は非常に低く、また、地域アセスメントという貴重な取り組みも団地の方々の参加はほとんどなかった。その意味でも、団地住民とフィールドパートナーでもある静岡市社会福祉協議会と連携し、団地の意見をより正確につかみたい。

そのうえで、私たちが住民とともに、高齢者や子どもの居場所づくりを着実に進めてきた成果を大切にし、住民の実態を共同で把握し、その中から自治力の向上を目指し、地域共生社会の構築と住民主体の地域福祉の形成に一層寄与していきたいと考える。学生が活動の中でどんな役割を担えるのかについても、学生と自治会役員の方々でよく話し合っていきたい。

学内地域連携拠点

静大発 地域と大学の連携を広めよう!

メンバー

(地域経営) 2年 伊澤功多、鈴木沙雪、古田萌黄、1年 田崎碧 (アート&マネジメント) 2年 坂口律子、1年 内柴麻衣

指導教員:○准教授 皆田潔、特任教授 岸本道明 ※○は青任教員

フィールドワーク実施協力者 静岡大学学務部教育連携室

学内地域連携拠点フィールドは、静岡大学学務部教育連携室を連携先として いる。2018年度より活動を開始し、静岡大学学務部教育連携室が中心となって 取り組む「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の促進を 目的として活動している。私たちの活動の柱は主に3つある。

1つ目は「静岡全域の大学生の県内就職促進」である。静岡県は人口流出ワー スト2位で、就職を機に若者の多くが静岡県外に転出している現状があり、こ の状況の打破に取り組んでいく。

2つ目は「地域創造学環の広報活動」である。COC+事業の一環として立ち 上げられた地域創造学環(以下、学環)の、とりわけフィールドワークにおけ る取り組みを外部に発信していく。

3つ目は私たちが「地域と大学の接点となる存在になる」である。学生自身 が自発的に地域貢献活動をしたいと思っても、その窓口となる場所がない。ま た、大学側は地域からの依頼があっても学牛につなぐ手段がない。そこで、私 たちが窓口となるべく、その手法を模索する。



教育連携室で話し合いを行う様子

これまでの活動

私たちは、3つの活動の柱のうち、②地域創造学環の広報活動、③地域と大学の接点となる存在になることを中心にこれま で活動を行ってきた。

学環の他のフィールドワークへの取材(松崎町へ)

地域創造学環の広報にあたり、各フィールドの活動を知る必要があると考えて、松崎町での フィールドワークに同行し、取材を行った。第三者の視点でフィールドワークを観察し、フィー ルドワークの様子をニュースレターにまとめ、地域創造学環の活動として外部に発信した。



大正大学との交流

大正大学地域創生学部と2回にわたる交流を行った。インタビューや大正大学訪問でわかっ たことをもとに、地域創造学環と比較し、学環の良い点、悪い点について意見を出し合った。 その比較を踏まえて、今後地域創造学環の広報を行うにあたり、学環の魅力と課題を発見する ことができた。



大正大学への訪問/取材の様子

2019年度の活動のテーマと目標

今年度は『地域創造学環を外部に発信する!』をテーマに、主に受験生に向けた情報発信を行った。それは、私たち自身が 学環を目指す受験生だった際に、自分たちが求める情報、知りたい情報となかなか出会えなかったからである。自分たちが受 験生だった頃を思い出しながら、欲しかった情報などについて話し合った。そこで出た意見をもとに、「オープンキャンパス (以下、OC)をより魅力的なものにし、地域創造学環HP(以下、学環HP)をより利用しやすいものにする|ことを目標に活 動することになった。

2019年度取り組んだことと成果

地域創造学環ホームページの改定

学環の魅力を受験生により広く伝えるため、学環HPの内容を改定することにした。センター試験が終了し、受験生の多 くがHPを閲覧するであろう1月中旬に公開することを目標に、アンケートやインタビューの実施、教員との協議、資料の 作成、プレゼンテーションなど、1年を通して取り組んだ。

【オープンキャンパスでのアンケートの実施】

7月28日に行われた夏季OCにて、受験生に学環HPの利用状況、求めていた情報や情報への到達具合など全10間のアン ケートを行った。そして集計結果をもとに、学環HPの具体的改定案をまとめた。

【学環入試広報委員会でのプレゼンテーション】

12月13日、学環入試広報委員会にて、アンケートをもとに考案した学環HP案を用いたプレゼンテーションを行った。掲 載内容や予算など、いくつかの問題点について指摘を受けたが、迅速に内容を改善し、先生方の協力もあって今年の1月 中旬、無事に学環HPに「学生の声」という項目を追加することができた。

実際に行った学環HP改定 👸 🔘





【学環HP追加記事】

地域創造学環

学環HPに「学生の声」という 項目を追加した。学生の写真と 情報、これまでの時間割、受験 生へのメッセージといったコン テンツを追加することにした。 各コースから1名学生を選定し、 現在学んでいることや将来の夢 など計5つの項目についてイン タビューを実施、それをもとに 掲載記事を作成した。

地域創造学環 展示企画の実施

学環の広報の一環としてOCで何か企画を行いたいという意見から、夏季 OCへの参加及びキャンパスフェスタ(秋季OC)で企画を実施した。①フィー ルドワークのポスター展示、②学環1年生への質問コーナー、③各フィール ドワークの特産品展示及び試食会などの意見が挙がり、実施のための準備に 取り掛かった。しかし、③が諸事情により実施不可能となってしまったため、 急遽④フィールドワークで活躍している学生の写真とメッセージを記載した ポスターを作製し展示した。11月16日、17日の2日間にかけて開催されたキャ ンパスフェスタでは約100名の来場者があり、フィールドワークメンバーと他 4名の学生が対応にあたった。



OCで受験生と話す様子

これから取り組むべきこ

♡OCのさらなる発展

今年度はOCのお手伝いという側面が強かった。より学環について受験生が理解できるものとするために、例えば「フィー ルドワーク体験」のようなイベントを私たちのフィールドワークが主催で行ってみたいと考える。

☆学環の学生間で交流できるイベントの開催

各々のフィールドワークで得た活動の経験や発見を学生同士でざっくばらんに話し合う機会がないと考える。そこで、お 互いの活動のヒントを得たり、あるいはフィールドワーク同士でコラボできるよう話し合えるなどの機会を作れる場を作り

そして、各フィールドワークで集まっての情報交換会をきっかけにして、さらに「学環生が交流できる」催しを私たちの フィールドワークで主催してみたいと考える。学環生同士でつながりをもつ機会が少ない学環自体に活気が増すと考える。

心他大学との連携

「学環の発信」を1つの活動目標と掲げていた。その過程で、学環のフィールドワークのように地域活動を行っている大学 はないかと調べたところ、他大学でも様々に地域と連携した活動が行われていた。具体的な案は検討中だが、情報共有など 連携する機会を作りたいと考える。



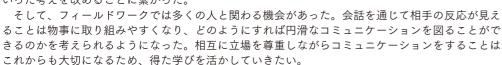
2019年度に2年半の活動を終えた学生たちの声を ご紹介します!

~地域とのかかわりや実践を通じて得た学び、自らが成長できたこと~

「地域創造学環フィールドワーク」では、学生は、1年次後期から2年半、原則同じフィールドに継続的に関わり活動をします。2019年度に2年半の活動を終えた学生たちからの声を集めました。

浅間通り商店街での活動からは、現代においての人と人の温かな繋がりの大切さを学んだ。 商店街の方々と交流する機会では、実際にコミュニケーションを取ることで商店街の現状だけで なく、「アナログ的なやり取り」が地域社会では重要であることが見えてきた。

我々学生のような若い世代は、SNSを通じてのコミュニケーションや情報共有をする機会が多い。しかし、商店街のような場所ではチラシというアナログ的な情報拡散の方が効果的であることがわかった。地域社会では幅広い年齢層の人がいるため、「SNSを活用すれば情報が行き届くだろう」といった考えを改めることに繋がった。



(浅間通り商店街フィールド 佐野 乃雪)



フィールドワークの活動を通し、学んだことや成長できたことは2つあります。

1つ目は、地域の動きに興味が湧いたことです。浜通りに位置する「服部家」の利活用についてのワークショップや活性化フォーラムに参加したことで、焼津市役所や市民の方の意見を聞くことができました。また、似たような取り組みを行っている地域の視察にも参加することができ、様々な地域を見ることができました。地域の変化に対し、多くの人が携わっていることを知り興味が湧きました。

2つ目は、市民の声を聞くことの重要性を学んだことです。夏のあかり展や、焼津水産高等学校の模擬会社「魚国」のイベントにおいて、対面式のアンケート調査を行いました。焼津市に対してどのような評価をしているのか直接聞くことができ新鮮でした。また、大人と若者の間で異なる意見を持っていることが調査を通じてわかりました。生の声を聞く重要性を知ることができ、貴重な経験になりました。

(焼津市浜通りフィールド 藤田 真由)

浜松文芸館では、若者の文芸離れを食い止めるという明確な目標があり、私たちを受け入れてくださる理由として年齢の近い大学生の視点や価値観を取り入れたいという明確な目的があった。

その目標や目的を達成するための活動の一環として、私は小学生向け企画の運営を2回経験した。そこで臨機応変な対応が重要だということを改めて感じた。『若者と文芸を楽しい気持ちで結びつける』という企画をやる意義を常に意識することや、企画の内容を深く理解して考えうる限りの下準備を行うこと、スタッフの学生や先生方、目の前の子供達の様子をよく見て真摯に対応することが大切だと学んだ。また、2年半の活動で、フィールドメンバーの性格や特技、長所に着目して、それらを最大限活かすことを考えた。そのためにフィールドワークの雰囲気づくりや接し方、特技の組み込み方を考えるようになったのは大きな成長点だと感じる。



(浜松文芸館フィールド 伊藤 悠希)



2年半、佐久間という地域に関わり、地域活性化について取り組んできた。地域の団体の活動に協力したり、地域の魅力を発信したりする中で、地域の課題と向き合い、地域活性化のために何をすれば良いのか試行錯誤を繰り返してきた。最初は学生の力だけではどうしようもない現状に何をすれば良いのか分からず、手探りの状態で地域団体と関わり、行事、活動に積極的に手伝うことしかできなかったが、その活動を続けていくうちに商品の開発に携われたり、行事ではブースの運営を任されたりと地域の方に頼ってもらえるように少しずつ変化していくことができた。自分自身も最初は活動に対して受け身であったが、活動の中で自分から主体的に地域住民の方々とコミュニケーションを取る機会を増やしていくことができたと実感している。

(佐久間フィールド 末広 皐)

フィールドワークを行ったことで、地域に対しての関心が深まったと感じています。今までは「競技スポーツ」にしか興味のなかった私が、今では「地域スポーツ」「生涯スポーツ」に興味を持ち始めています。フィールドワークを行うことで自分の考えの幅が広がり、成長ができました。地域づくりに大切なことは「求められていること」「私たちにできること」「私たちがやりたいこと」この三点から考えることで、「自分がこうやりたいから!」というエゴだけでは地域づくりはできません。自分の力量をしっかり把握し、地域の方の声に耳を傾け、そのうえでやりたいことを考えていくことが大切であると学びました。私にとってフィールドワークは新しい世界が広がるきっかけになりました。今後も地域の繋がり、人と人との繋がりを大切にしていきたいです。

(とうもんの里フィールド 萩原 那緒)



2年半の活動での感想は、純粋に、松崎町のことが好きになったということです。フィールドワークが終了して、同期達は、「また松崎町に来たい」と口を揃えて言っています。フィールドワークがなかったら、知らなかったかもし

す。フィールドワークがなかったら、知らなかったかもし

れないこのまちで、たくさんの魅力に出会うことができました。地域にはさまざまな 課題があると言われますが、実際にフィールドに行くことで、それらの課題や地域の 変化の中で苦悩しながら活動をされている方々の様子、そして人と人との関わりがと ても強い松崎町の地域性を身体で感じることができたのは、とても良い経験だったと 思います。そして、「よそ者」である私たちのアイデアや活動を、優しく受け入れ、た くさんの挑戦をさせてくださった松崎町の皆さんにはとても感謝しています。松崎町 に来て本当に良かったなと思います。ありがとうございました。







実際に地域の一員となり、地域の方の考え方や価値観に共感することの大切さを学びました。私が1年次に活動していた際は、フィールドワークメンバーのみでイベントを考えており、地域の方の意見を反映できていませんでした。その結果あまり手応えがないままイベントが終わり、地域の方との共感がなければ地域にとって本当にいいイベントは開催できないのだと気づかされました。そこで2年次からは地域の方との交流を大事にして活動を行い、交流会や地域での会議に参加させていただきました。今まで交流の無かった方や、商工会議所の方とお話しをすることができ、地域の方が本当に地域で求めているものを知ることができました。そういった考えに共感しイベントを企画することで地域の方に協力していただくこともでき、よりレベルの高いイベントを企画開催できるようになりました。今では地域の一員になれたと感じています。

(東伊豆町フィールド 池田 橘平)

地域との関わりの中で、地域住民の地元への興味が薄い場合がありそこへのアプローチの仕方の難しさがあることに気づいた。伊豆半島ジオパークでは、本部が設置されている修善寺に住む人でもジオパークの取り組みについてあまり知らなかったようだった。地元の人の積極的な参画は地域活性に大きく貢献するが、それを押し付ける形になってしまうのは本質的ではない。この葛藤の中で、「地域と住民の親和性を高める」という目的に到達できる最善の方法は何か、頭を凝らす必要を感じた。結果、私達はいろんな角度からジオパークに関連づけて関心を誘うという方法を見出した。それまで知識があまりなかった学生が、着々と学びを得ながら外部の人間として何ができるのか、考えるようになった。そして最終的にはそれぞれ考案したジオパーク教育の企画を形に描き共有できるまでになった。



(ジオパーク(教育)フィールド 岡部 由佳)



私は地域環境・防災コース所属であり、異分野のフィールドに入るのは挑戦であった。しかし、この異分野のフィールドワーク先を選んだことは私にとってとても良い経験になった。フィールドワークが始まるまでは防災のことばかり学んできたが、フィールドワークが始まり、福祉のことにも興味を持てるようになった。今までであれば聞き流していたであろう孤独死や買い物難民に関するニュースが耳に入ってくるようになった。これらの知識は地域には様々な人が住んでいて人それぞれのニーズがあることを気づかせてくれ、私の専門である防災を考える上でも役に立った。また、他コースの学生の意見などを聞くことで、様々な考え方があることを実感することができた。これらの経験が私にとっての学びであり、財産である。

(県営団地フィールド 櫻木 哲朗)

地域創造学環のフィールドワークにご協力いただいている 地域のみなさまからの声をご紹介します!

地域創造学環のフィールドワークは、多くの地域の方々からご協力をいただいています。今回は、フィールドワークの活動が始まった2016年10月からお世話になっている方々から、これまでの活動についてお伺いしました。

※表記の所属、役職名等は2019年度のもの



公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館 館長 下石 精子様

挑戦しなければ明日は変わらない!

なんと言っても忘れられない作品は、皆でじっくり話し合って作成した浜 松文芸館広告ポスター『ある日息子が俳人になって帰ってきた』。このキャッ チコピーは傑作です!俳句を切り口に、高校生や小学生を対象に取り組んだ ワークショップの数々も大成功でした。「合作俳句」は、ガチャ機のダイヤル を回して出てきたガチャ玉を通して、新たに子供たちの前に登場します。きっ と子供たちは楽しんでくれることでしょう。こうして浜松文芸館は、確実に 進化しつつあります。これも皆さんのお陰です。ありがとう!

これからも、更に企画力・行動力に磨きをかけ、挑戦し続ける皆さんであることを期待します。

学校も、受け入れ先も学生たちもお互いに暗中模索の一年目。失敗を体験させる場としてのフィールドワークがスタートした。失敗の先の成功体験こそが重要。ちっちゃなガッツポーズ作戦である。自分達で考え実践し反省し、次につなげる繰り返しの中で、学生が、どんなポイントでガッツポーズを挙げたかは知る由もない。しかし、それぞれが体験したと信じている。

とうもんのキーマンになるとチーム名を「Keymon」と名付けた彼らは、次々に新しい企画を打ち出した。3年がかりで実施したプロジェクトもある。ともに歩いた4年間は、一人の学生にとっては15回30日間の交流に過ぎないが長さではない。彼らの人生に少しでも糧になれたならと思う。

まっつ およかき (

とうもんの里 <u>フィー</u>ルド

NPO法人とうもんの会 名倉 光子様



松崎町教育委員会事務局 事務局長 深澤 準弥様 松崎町では、静岡大学地域創造学環のフィールドワークを受け入れさせていただいてからちょうど4年を迎えました。初めて受け入れた学生が、来年度から社会に出ていくことになり、松崎町で学んだことが役に立つのか真価が問われることになります。松崎町を選んでくれた学生たちに町を知ってもらい、数ある課題を共有し、解決に向けて活動してもらうことに意味があると思い、いろいろな地元人と会わせたり、地域の祭りに参加してもらったり、できることを学生と一緒に体験し、学んだ4年間であったと思います。参加する学生もフィールドである地域も一緒に育っていけると信じてこれからもフィールドワークを受け入れていきたいと思います。

2019年度 静岡大学 地域創造学環 フィールドワーク報告書 2020年5月28日発行

編集発行 国立大学法人静岡大学 地域連携推進課 地域創造学環係